
山田伸時 / 後藤智花 2

松本 由樹彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山田伸時／後藤智花2

【Nコード】

N8026K

【作者名】

松本 由樹彦

【あらすじ】

16歳の山田伸時と後藤智花は、小1の秋の遠足の前の日から付き合っている。寒そうな夢の国に行ったり、ひざを痛めたり、鼻の中を刺激しあったり、からあげを買ったり、している。

1 五日連続でサッカー部に行ったら疲れた

五日連続でサッカー部に行ったら疲れた。疲れたのでまっすぐ帰って、ごはんを食べて、風呂に入って、髪の毛を乾かして、歯を磨いて、電気を消して寝ていたら、智花^{ちか}から電話がかかってきた。

「もしもし」

「もしもし」

「どうかした」

「眠れないの」

「不眠症」

「そうみたい」

「めぐすりを、飲むといい」

「飲んだけど、眠れないから、あそぼう」

「いやだ」

「どうして、そんなことを言う」

「僕は、五日連続でサッカー部に行ったから、すごく疲れてる。しかも、すでに寝ている」

「じゃあ、あいだをとって、一時間だけあそぼう」

僕は少しのあいだ考えた。

「一時間だけなら、いい」

「いまから行くわ」

僕の部屋のドアが開いて、智花が入ってきて、電気をつけた。

「早い」

「じつは、部屋の前から電話してた」

智花は椅子を持ってきて、ベッドの隣に座った。

僕はベッドから体を起こして、壁にもたれた。

「何してあそぶ」

智花は少し考えた。

「あっちむいてほいがいい」

僕と智花はあっちむいてほいを始めた。あっちむいてほいをしていたら、智花が、そういえば、と言って、あっちむいてほいをやめた。

「サッカー部は、日曜日もあるの」

「あるときもある。ないときもある」

「今週の日曜日は、あるとき？」

「今週の日曜日は、ないとき」

「今週の日曜日に、わたしと、瑞歩と、小池^{こいけ}くんと、四人であそぶ」

「瑞歩と小池くんって、だれ」

「瑞歩は、わたしの友達で、小池くんは、瑞歩が好きな人」

「瑞歩と小池くんは、付き合ってる」

「瑞歩と小池くんは、付き合ってるけど、瑞歩は、小池くんと付き合いたいと思っているから、わたしは、くつつけちゃえ、思ってる」

「だから、さりげなく四人であそぶ」

「そういうこと」

「何してあそぶ」

「シベリアワールドに行くのはどう」

「あの、寒そうな夢の国」

「行ったことがある？」

「行ったことはない」

「行ってみたいかい？」

「行ってみたいかも」

「じゃあ行こう」

「そうしよう」

僕と智花はあっちむいてほいを再開した。だんだんと手をあげるのがめんどくさくなってきたので、途中からは全部口で言った。途中で母さんが部屋に来て、蛇が出るからもう寝なさい、と言って、ドアをボタンと閉めた。

「そんなに、うるさくしてないのに」

智花はドアをにらんだ。

「智花はまだ、眠くならない」

「眠くならない。もっとあそぼう」

「でも、もう一時間たつたから、帰って」

智花は僕をじつと見た。

「じゃあ、すぐに寝られる裏技を教えて」

僕はすぐに寝られる裏技を考えた。考えていたら、寝そうになった。頭がかくんとなったところを、智花が手で押して戻してくれた。

「考えていたら、寝そうになる」

「どういう意味」

「どうやったら、寝られるかを、考えていたら、寝そうになった」

「どうやったら寝られるかを考えることが、寝そうになることなのね」

「いまは、そうだった」

「複雑に思えるけど、単純なことなのね」

「そのようだ」

智花は椅子から立った。

「わかったから、わたしは帰る」

「智花は、もう寝られる？」

「たぶん、眠くなったら、自然に寝る」

2 日曜日なので朝からランニングをした

日曜日なので朝からランニングをした。公園で六日ぶりに見た死んだカラスは六日前より毛並みが悪くなっていた。黒が汚れて、白っぽくなっていた。ちよつとかわいそうだったけど、死んだカラスが死んだのはもう三ヶ月も前のことだと思うから、仕方がないことかもしれない。

家に帰ったら、智花が僕の家のインターホンを何回も押していた。すでに父さんが玄関から出てきているのに、智花はインターホンを押し続けていた。

僕は智花の肩を叩いた。

智花は振り向いて僕を見た。いらいらしているみたいに見えた。

「どこほつつき歩いてた」

「サッカー部が休みだから、ランニングをして、死んだカラスを見してきた」

智花は僕の肩を突き飛ばした。僕は後ろによろめいた。

「こんな日にか」

「日曜日だから」

「瑞歩と、小池くんと、シベリアワールドに行くのを忘れたか」

「智花ちゃんと伸時^{しんじ}、シベリアワールドに行くの？父さんも、行きたいぞ」

「忘れてない。いまから行く」

僕は家の中に入った。智花も家の中に入ってきた。僕がシャワーを浴びて着替えが終わるまで、智花は母さんと話をしていたようだった。

「おまたせした」

「おそい」

智花は僕をにらんだ。

「十時に、金宮町^{きんぐうちょう}の駅にいないといけないのに、あと二十分しかない

い。どうしてこんな日に、走ったりする」

「僕は控えの右サイドバックだから、本物の右サイドバックが休んでいるときにも練習しないと、本物の右サイドバックになれないから」

「もう、走らないと、間に合わない」

「父さんに言って、車で送ってもらえばいい。父さん」

父さんがのこのこ歩いてきた。僕は父さんに、父さん、金宮町の駅まで車で送って、と頼んだ。

父さんはやっぱり智花を見た。智花は父さんから目をそらした。

「智花ちゃんが、おじさんの頭のとっぺんの薄くなりかけのところに、ふーって息をかけてくれたら、車で送ってあげるよ」

父さんはにやにやした。

智花が頭を抱えた。

「おじさん……、昔は、もう少しまともだったのに……」

「父さん、目を閉じて」

父さんは目を閉じた。

僕は父さんの頭のとっぺんの薄いところをふーってした。

父さんは、智花が父さんの頭のとっぺんの薄いところをふーってしてくれたと思ったみたいで、僕と智花を金宮町の駅まで車で送ってくれた。

それでも金宮町の駅に着いたのは十時十分だったので、すでに瑞歩と小池くんが、僕と智花を待っていた。僕が瑞歩と小池くんに会うのはこれが初めてだったけど、智花が迷わず近づいていったので僕はその二人が瑞歩と小池くんということがわかった。瑞歩は思ったよりも髪の毛が長くて、小池くんは思ったとおり背が低かったが、二人ともやさしそうな顔をしていた。瑞歩と小池くんは二人きりだったので、かなり気まずそうだった。智花が、瑞歩と小池くんに、遅れてごめんなさい、と謝った。僕も、瑞歩と小池くんに、遅れてごめんなさい、と謝った。瑞歩は、作り笑いをしていた。小池

くんは、いいよ、いいよ、気にしないで、と顔の前で手を振りながら微笑んでいた。そして智花の左側をちらりと見た。智花の左側には、父さんが立っていた。左側に父さんが立っているの、智花はかなりいらいらしていた。

智花が僕に耳打ちをした。

「伸時、このままだと、おじさんがついてきて今日が台無しになってしまうから、早くおじさんを追い返して」

「わかった」

「ほんとうに、早くして。この会話をしていることすら、めんどくさい」

「わかった」

僕は父さんを見た。父さんは、にやにやしていた。

「父さん帰れ」

「え」

父さんはびつくりした。僕が父さんに命令をすることは滅多にないことなので、父さんはかなりびつくりしていた。

「父さんがいると、みんなの楽しい気持ちが台無しになるから、早く帰れ」

「え」

父さんはおろおろした。智花は父さんをにらんでいたけど、瑞歩と小池くんは、そこまで言わなくても、という感じの顔をしていたので、僕も言い過ぎたような気がしてきた。

「おみやげを買ってくるから、今日は家に帰れ」

父さんはしばらく考えていた。

「智花ちゃんも、おじさんにおみやげを買ってきてくれる？」

智花がすごく嫌そうな顔をした。智花が、買ってこない、と言いそうだったので、僕は智花の右足の外側を軽く蹴った。智花は嫌そうな顔で僕を見てから、父さんに、買ってくる、と言った。

父さんはうれしそうに、何回も飛び跳ねた。

「やったー、やったー、智花ちゃんは、おじさんに何を買ってきて

くれるの？」

「3Dメガネを買ってくるわ」

「伸時は、父さんに何を買ってきてくれるの？」

「僕も、3Dメガネを買ってくる」

「それでおじさんは、合わせて6Dのおじさんになるわ」

「6Dって、どれくらいすごいなの？」

「ギネス級にすごいわ」

父さんは何故か褒められたと勘違いしたみたいで、照れていた。首の後ろを手でかいていた。

「じゃあ、楽しみに待ってるよ。智花ちゃん、伸時、瑞歩、小池くん、いつてらっしゃい」

父さんは車に乗って帰って行った。僕は切符を買いに行こうとしたが、智花は首をひねっていた。

「どうした、智花」

智花はぼんやりした目で僕を見た。

「おじさんは、どうしてか、瑞歩と小池くんの名前を知っていた」

「そういえば」

「どういうことだと思う」

僕は考えた。考えていたら、わかった気がした。

「これは、言わないほうがいいかもしれない」

「どうして」

「智花にとつて、とてもつらいことだから」

「覚悟はできているわ。言って」

「父さんは、智花の部屋を盗聴している」

智花はぶるぶると震えた。

「そんなことが……」

「それだけなら、まだいいけど」

「どういうこと」

「父さんは、智花の部屋を盗撮しているかもしれない」

智花は両手で口を押さえた。そのまま倒れそうになっていたので、

僕は、智花の背中に手を添えた。

「吐きそう……」

「まだわからない。違つかもしれない」

「うん。あのおじさんなら、やりかねない。わたし、いつかはこんなことになる、思っていたの……」

「智花は、気分が悪い？」

「わたしは、気分が悪い」

「気分が悪いときは、ベンチに横になるといい」

智花はかすかにうなずいた。

「ベンチまで、つれていって」

僕は智花の肩を支えながら、ベンチまで歩いて、ベンチに智花を寝かせた。瑞歩と小池くんは、心配そうな顔をしていた。瑞歩が、伸時くん、智花はどうしたの？、と僕に聞いた。僕は、自分の父さんが盗撮をしていたなんて言うのが恥ずかしかったから、智花は車に酔ったのだ、と答えた。小池くんが何かを言いかけたところで、智花ががばっと起き上がった。

「そういえば、わたし、さっき伸時の家の前で、瑞歩と小池くんの名前を口に出したわ」

「そうだった」

「うん。『瑞歩と小池くんとシベリアワールドに行くの忘れたか』って言ったわ。それで、おじさんがついて来ちゃったから、間違いないわ」

「ということは、父さんが瑞歩と小池くんの名前を知っていたからといって、父さんが智花の部屋を盗撮していたことにはならない」

「そう。でも、盗撮していたとしてもおかしくない。あのおじさんだもの。むしろ、盗撮していないほうが不自然」

「でも、いくら父さんでも、智花の部屋を盗撮していたのがばれたら、智花の家との関係がぎくしゃくするから、そこまではしないよ。うな気がする」

「伸時は、おじさんを信じるの？」

「うん」

「どうして」

「僕の父さんだから。それに、いままでは言わなかったけど、父さんが、昔から智花のことをかわいく思っているのは変わらないし、智花が思春期になったから、だんだん気になるようになっていくかもしれないから、父さんは盗撮をしていないと思う」

智花は腕を組んで考えていた。

「智花は、父さんが嫌い？」

「わたしは、おじさんが嫌い」

「やっぱり」

「でも、顔も見たくないほど嫌いでもないわ」

「やっぱり」

「帰ったら、コンセントカバーを外してみるわ。何もなければ、おじさんは無実」

「それがいい」

瑞歩と小池くんは、早くシベリアワールドに行きたそうだった。

3 僕と智花と瑞歩と小池くんは特急電車でシベリアワールドへ向かった

僕と智花と瑞歩と小池くんは特急電車でシベリアワールドへ向かった。シベリアワールドは貝田野市かいたのしにあるのだが、金宮町の駅から貝田野市のシベリアワールド前駅までは、特急電車で一時間ちよつとかかるとのことだった。日曜日なので、電車の中は混んでいて、最初は僕も智花も瑞歩も小池くんも座れなかったが、三つ目の駅で僕の前に座っていた人が二人降りたので、僕は早い者勝ちだと思って、椅子に座った。僕の隣には瑞歩が座った。小池くんが、伸時くん、と手招きをした。

「こういうときは、女の子を座らせてあげないと、だめだよ。智花ちゃんに席を譲らないと」

「え」

僕は驚いた。そんな決まりがあつたなんて知らなかった。

「そうなのか」

「そうだよ」

「智花、そうなのか」

智花はゆつくりとうなずいた。

「じつはそう」

「僕はこれまで、智花と電車移動するときは、ばんばん席を取ってきたけど、それは間違いだったのか」

「じつはそう。伸時は、わたしの席を取るたびに、周りの人から、ああ、何か残念な子だわ、今日はすごくいやなものを見ちゃったわ、って、思われていたのよ」

「そうなのか」

「そうなのよ」

僕は椅子から立った。智花は僕が立った椅子に座った。僕は左手でつり革を掴んだ。

「伸時、ありがとう」

「めっそうもない」

智花と瑞歩は座ったままで話をはじめた。僕は小池くと立ったままで話をはじめた。

「小池くと話をすると、勉強になるようだ」

「めっそうもないよ」

小池くんは、僕の発言を堂々とぱくつたうえで笑った。

「小池くんは、何組だ。僕は二組だ」

「僕は四組だよ。智花ちゃんと瑞歩ちゃんと一緒だよ」

「ということは、智花と瑞歩と小池くんは同じクラスで、僕だけが二組なのか」

「そうだよ」

「小池くんは何部だ。僕はサッカー部だ。ポジションは、右サイドバックの控えだ」

「僕はNASA部だよ」

「なさぶとは、何の部だ」

「アメリカ航空宇宙局についての研究をするクラブだよ。山田くんは、ジェミニを知ってる？」

「ジェミニ計画か」

「あれ？知ってるんだね」

「スカイラブのラブは、ラボタリーの略だということも知っている」

「ラボタリーじゃなくて、ラボラトリーだよ」

「それにしても、NASA部という部があることは知らなかった。部員は何人いるのだ」

「二十人くらいかな」

「そんなに」

「みんなNASAが好きなんだよ」

「小池くんは、ラーメンが好きか」

小池くんは苦笑いをした。

「僕は初対面の人全員に、その質問をされるよ」

「気を悪くしたか」

「めっそももないよ。僕は小池だからね。ラーメン大好きのイメージを持たれるのはしょうがない。でもさ、伸時くん、ラーメンが嫌いな人って、そんなにはいないよね」

僕はラーメンが嫌いな人を思い浮かべようとした。ラーメンが嫌いな人はひとりも思い浮かばなかった。

「ラーメンが嫌いな人は、僕の知り合いでは、ひとりもない」

小池くんは満足そうにうなずいた。

「僕もラーメンが好きだよ。でも、大好きで毎日食べるほどじゃないし、行列に並んでまで食べたいとは思わない。普通に好きだよ」僕は思わずうなずいた。

「小池くんは、僕の友達にはいないタイプのような」

「伸時くんも、僕の友達にはいないタイプだよ」

「今日が終わった後も、仲良くしてくれるとうれしい」

「僕もそう思うよ」

小池くんは僕に手を差し出した。僕と小池くんは握手をした。それで僕と小池くんは、かなり打ち解けたことがわかった。

「小池くんは彼女はいるか。僕は智花と九年半も付き合っている」

「タイガー」

「あう」

いきなり、僕の前に座っていた智花が、僕の膝を両手で殴った。

「タイガー、タイガー」

「あう、あう、智花、やめろ、何故電車の中で、タイガーショットを放つ」

「ちがう。これは、グランドタイガー」

「あう、何故電車の中で、グランドタイガーを放つ」

瑞歩が、くくつ、と笑った。

「智花は、伸時くんが小池くんとはかり喋ってて、智花と喋ってくれないから、機嫌が悪くなったのよ」

「智花はご機嫌斜めなのか」

「ちがう。わたしは、グランドタイガーの練習をしているだけ。タイガー、タイガー」

「あう、あう」

一時間ちよつとで貝田野市のシベリアワールド前駅に着いた。そのころには僕の膝はぼろぼろになっていたので、僕は小池くんを肩を支えてもらいながら、どうにか改札をくぐる事ができた。

小池くんは僕に氣をつかった。

「伸時くん、大丈夫？」

「ひどい目にあつた」

「大変だつたね」

僕はうなずいた。

「まるで、拷問のような時間だつた」

僕は足を引きずっているのに、智花は瑞歩を引きずつて、どんどん先を歩いていって、シベリアワールドの入り口の前で止まっていた。僕と智花と瑞歩と小池くんのなかでは智花がいちばん楽しそうにしていたので、僕は、智花は瑞歩と小池くんをくつつけるという口実で、シベリアワールドに來ただけだつたのではないかと疑つた。

「すごいわ。シベリアワールドは、やっぱりすごいわ」

智花が興奮していた。興奮している智花は、僕が追いつくのを待つてから、尋ねてもいないのに、僕にうんちくを述べ始めた。

「この、貝田野シベリアワールドは、ノヴォシビルスク、モスクワ、ヘルシンキ、レイキャビークに続いて、世界で五番目に作られたシベリアワールドなの」

「なるほど」

「シベリアワールド発祥の地であるノヴォシビルスクは、寒いときはマイナス四十度くらいになるの」

「マイナス四十……」

僕は首を縮めた。

「そのため、この、貝田野シベリアワールドでも、開園当初は園内の気温をマイナス四十度に保っていたの」

「でも、そんなことをしたら」

智花はうなずいた。悲しそうな顔をした。

「お客さんが、あまり来なかったの」

「そんな悲しい過去があったのか」

「そう。だから、シベリアワールドの経営者が妥協して、園内の気温を常温で保つようにしたの。そうしたら、大繁盛して、いまでは日本五大テーマパークのひとつに数えられるまでになったのよ」

「いい話」

僕と智花と瑞歩と小池くんは、シベリアワールドの一日フリーパスを四千五百円で買った。一日フリーパスは青色で、手首に巻くもので、切らないと取れないタイプのものだった。

シベリアワールドの中に入る前に、智花は右手に巻かれたフリーパスをじっと見た。

「どうした、智花」

智花は僕をちよつと見た。

「小学生のとき、遠足で遊園地に行くと、次の日も、フリーパスをつけている子が、クラスに三人はいたわ」

「そういえば、いた」

「わたしも、その三人のうちのひとりだったわ」

「僕も、その三人のうちのひとりだった」

「もうひとりは、誰だったの」

僕は考えた。智花も考えた。

「僕は、思い出せない」

「わたしも、思い出せないわ」

僕は身震いをした。智花も身震いをした。

「もうひとりは、どこに行ったの？」

「わからない」

「もうひとりは、何者なの？」

「わからない」

「もうひとり、ほんとうに、この世に存在していたの？」

「わからない。何が何だか、わからない」

「なんだか、ここが、マイナス四十度のシベリアワールドのような気がしてきたわ」

「ホラー体験」

「ホラー体験」

気がつくと、瑞歩と小池くんが、すでにシベリアワールドの中に入っていた。

「智花、瑞歩と小池くんが、すでにシベリアワールドの中に入っているから、僕たちもシベリアワールドの中に入ろう」

「そうね。あんまり怖いことを考えると、夜、家の階段を上れなくなるわ」

「智花はまだいい。エリカがいるから、エリカと一緒に階段を上げば、こわくないし、おもしろい。僕はひとりで、階段を上らないといけない」

「じゃあ、伸時が階段を上るときは、エリカを貸してあげるから、電話して」

「わかった」

「エリカが、ひとりで伸時の家に入れるように、玄関の鍵は、開けておいて」

「わかった」

4 僕と智花と瑞歩と小池くんはシベリアワールドの中に入った

僕と智花と瑞歩と小池くんはシベリアワールドの中に入った。まずシベリアワールドの案内図を見ていたが、智花はすでにシベリアワールドのマップが頭に入っているらしく、そんなものを見るまでもない様子だった。

「伸時は、この、シベリアワールドで最高の乗り物は何かということを知っている？」

「知らない」

「シベリアワールドで最高の乗り物は、シベリアン・デス・マウンテンです」

「恐ろしい名前。察するに、ジェットコースターか」

智花はうなずいた。

「シベリアン・デス・マウンテン、それは、世界一速くて、世界で一番回転して、そのため、風が強すぎて、マイナス四十度を体感できるマシンなの。そして、レールが途中で途切れてて、ジャンプして、次のレールの飛び乗るの」

「すごい」

「言葉だけじゃ、すごさがすべて、伝わらないわ。一刻も早く、シベリアン・デス・マウンテンに乗ろう」

「そうしよう」

「そうしよう」

「ちょっと待って」

小池くんが、僕と智花の前に立ちはだかった。真面目な顔をしていた。

「シベリアン・デス・マウンテンは、危険だ。危険すぎる。智花ちゃん、シベリアン・デス・マウンテンが、最初どつという目的で作られた乗り物なのか、知っているんだろう？」

智花は舌打ちをした。

「もちろん、知っているわ」

「それでも、乗るっていうの？」

智花はうなずいた。

「わたしは、シベリアン・デス・マウンテンに乗るために、今日、シベリアワールドにやってきたの」

「智花、そうじゃない。智花は、瑞歩と小池くんをくつつ」

「タイガー」

「あう」

智花はその場にしゃがみ込んで、僕のぼろぼろの膝にグランドタイガーを放った。僕は膝を押さえてうずくまった。

「あうう。じゃあ、智花。シベリアン・デス・マウンテンが何故作られたのか、僕に教えて」

智花はうなずいた。

「シベリアン・デス・マウンテンは、旧ソビエトの、処刑器具なの」
「器具……」

僕はつばを飲み込んだ。

「悪いことをした人を、シベリアン・デス・マウンテンに乗せて、連続で何十周もさせると、悪いことをした人は、頭の中身がどろどろになって、人格が破綻して、生きたまま死んでしまうの」

「そんな恐ろしいものを、日本に輸入して、なおかつお金まで取っているのか」

「そうよ」

「ロシア……」

僕はこぶしを握りしめた。智花は僕の肩をぽむぽむ叩いた。

「伸時、ロシアを嫌いにならないで。ロシアはなんにも悪くないの。それに、シベリアン・デス・マウンテンは、連続で何十周もすれば生きたまま死んでしまうけど、休憩しながら乗れば、特に危ないことはないから」

小池くんが首を振った。

「でも、智花ちゃんは、知ってるはずだよ。一年間に最低ひとり、

シベリアン・デス・マウンテンに乗った人が、振り落とされて死んでいることを」

「そうなのか」

智花はうなずいた。

「その人たちは、たまたまシートベルトが壊れていた、運の悪い人たちなの」

「そうなのか」

僕はほっとした。

小池くんは、何故か少し怒り出した。

「運が悪いで済む問題じゃないんだ。そんな危険な乗り物に、僕の友達が乗るなんて、僕は見ていられない。本当は、誰も乗らないで欲しい。あんなシベリアン・デス・マウンテンなんて、壊れてしまえばいいんだ」

智花は小池くんを見た。

「でも、小池くん、考えてみて。一年にひとりしか死なないということは、五百万人にひとりくらいしか、死なないの。小池くんが道を歩いていて、車に轢かれる確率と、そんなに変わらないわ」

瑞歩が、智花と小池くんの間に割って入った。

「智花、やめて。小池くんが車に轢かれるだなんて、不吉なことを言わないで」

瑞歩が智花をにらんだ。小池くんも智花をにらんだ。楽しい雰囲気気が台無しになってきた。

智花が困った顔をして、僕を見た。

「伸時、これは、もしかして、わたしが何か間違ったことを言っているの」

僕は首を振った。

「智花は何も間違っていない。ちょっと、瑞歩と小池くんが、おかしい。言ってることが、宗教的だ」

「そうよね」

小池くんが、あー、と叫んだ。手を上下に激しく振っていた。

「そこまで言うなら、もう知らないよ。二人でシベリアン・デスマウンテンに乗ってくればいい。僕と瑞歩ちゃんは、死ぬのなんてごめんだから、二人でゴーカートとかに乗ってるよ」

瑞歩と小池くんはゴーカートがどこにあるのか、本当にシベリアワールドの中にゴーカートがあるのかも確認せずに、行ってしまった。

僕と智花は、瑞歩と小池くんが遠ざかっていくのを見ていた。

「小池くん、短気」

「そうね、小池くんは、見かけによらず、かなり短気ね」

「きつと、小池くんは、おながが空いてしょうがない」

「そうね、瑞歩と小池くんは、きつと、ラーメンを食べに行ったんだわ」

5 僕と智花はシベリアン・デス・マウンテンに向かった

僕と智花はシベリアン・デス・マウンテンに向かった。シベリアン・デス・マウンテンはシベリアワールドの目玉アトラクションなので、シベリアワールドの中心地点にあった。シベリアン・デス・マウンテンは、高さ百メートルからほぼ垂直に落下して、池の中に突っ込んで、池から上がったとたんにレールが途切れていて、ジャンプするようになっていた。そしてそこからまた落下してスピードを上げて、四連続回転をする仕組みになっていた。

シベリアン・デス・マウンテンを見上げた僕と智花は、開いた口がふさがらなかった。

「すごい……」

「すごいわ。シベリアン・デス・マウンテンは、やっぱりすごいわ」

「こんな器具に乗ることができるなんて、わくわくする」

「わたしも、一秒でも早く、処刑されたいわ」

僕と智花はシベリアン・デス・マウンテンに乗る順番を待つ列に並んだ。看板を見ると、ただいま九十分待ち、と書いてあって、待つのがもどかしく感じられたが、今日は日曜日なので、おとなしく列に並んで九十分待つことにした。僕と智花はそれほどおなかが空いていなかったが、並んでいる間におなかが空くといけないので、ピロシキを買って、ピロシキを食べながら列に並んだ。

列に並んでピロシキを食べて、十分ほどは、僕も智花も喋らなかったが、十分経ったら智花が喋りだした。

「さて、ここで、わたしがどうして、電車の中で、伸時の膝にグランドタイガーを連発したかを、説明するわ」

「たのむ」

「わたしは、伸時があるとき、小池くんに、小池くんは彼女がいるか、と聞いたから、ああ、これはまずい、伸時の口を封じないと、まずいことになってしまふ、と考えて、グランドタイガーを放った

の」

「どうして、智花は、僕が小池くんに、小池くんは彼女がいるか、と聞いたことを、まずいと考えた」

「わたしが今日シベリアワールドに来たのは、シベリアン・デス・マウンテンに乗るためだということは、さっきばれてしまったけれど、でも、瑞歩と小池くんをくつつけたいのは、ほんとうなの」

「うん」

「そのためにわたしは、瑞歩と小池くんをくつつける計画を立てているの」

「なるほど」

「そして、小池くんに彼女がないのは、わたしはすでに調べてあるの」

「そうだったのか」

智花はうなずいた。

「もしさっきの電車の中で、小池くんが伸時に、僕はいま彼女はいないよ、なんて言ったりしたら、伸時はそれを聞いて、なんて言うつもりだったの」

僕は頭の中でその会話をシミュレーションした。

「僕は、小池くんに、だったら瑞歩と付き合ったらどうか、と尋ねたと思う」

「そんなことになってしまうと、わたしの計画は台無しなの。でもわたしは、伸時にそれを直接言うわけにはいなくて、だからわたしは、伸時の口を封じるために、グランドタイガーを放ったの」

「そうだったのか」

「そうだったの。でも、伸時には、悪いことをしたと思っているわ。わたしのグランドタイガーのせいで、伸時がサッカーができなくなったら、わたしは、一生伸時に合わす顔がないから」

智花はしょんぼりした。僕は智花の肩をぽむぽむ叩いた。

「そんなに、気にしなくてもいい」

「伸時……」

「グランドタイガーは痛かったけど、もうひとりで歩けるくらいに回復したし、明日になったら走れるから、選手生命に影響はない。ほんとは少し怒っていたけど、理由を話してもらえたから、怒る理由は何もない」

「そう言ってもらえると、気が休まるわ」

「それで、智花が考えた、瑞歩と小池くんをくつつける計画は、どんなの」

「わたしは、わたしと伸時と瑞歩と小池くんの四人で観覧車に乗るふりをして、先に瑞歩と小池くんを観覧車に乗せて、わたしたちは乗らずに閉じ込めちゃおうと考えている」

「なるほど」

「観覧車が一周するころには、瑞歩と小池くんはくつついている」
「なるほど」

「この考えはどう」

「策士」

「ということは」

「グッドアイデア」

「夕方か、夜になったら、計画を実行に移すわ。そのほうが、ロマンチックなもの」

「すごくいいと思う」

「でも、いまは、とにかく、シベリアン・デス・マウンテンが、楽しみだわ」

「楽しみだ」

九十分後、僕と智花は、とうとうシベリアン・デス・マウンテンに乗ることになった。シベリアン・デス・マウンテンは四人並ぶの列が十個つながっていて、僕と智花はその六番目に案内された。手荷物をかごに入れてから、智花が右端に座って、僕が智花の隣に座って、僕の左に座った二人は知らない人だった。

僕と智花はシートベルトをきちんと締めた。

智花は、どうしてか、少し残念そうにしていた。

「どうした、智花、怖じ気づいたか」

智花は首を振った。

「わたし、一番前がよかったのに」

「贅沢を言っではいけない。何番目に座るかは運だから、いまは六番目でも、いつか一番前に座れる日が、きつとくるから」

智花は僕をじっと見た。

「そうね、わたしが間違っていたわ。真ん中が好きな人もいるくらいだから、六番目でも、楽しいわ。それに、これは、あのシベリアン・デス・マウンテンだから。ずっと乗りたかった、シベリアン・デス・マウンテンだから」

ビビビビビ、という音が鳴って、シベリアン・デス・マウンテンが始動した。シベリアン・デス・マウンテンはホームから外に出てぐんぐんレールを上っていった。周りに見えるどの建物より、高いところまで上っていった。

「すごい、すごい、智花、すごい。観覧車が、下に見える」

「やばいわ、伸時、わたし、いまさら、かなり怖くなってきたわ」

「下から人が、いっぱい見えている」

「公開処刑」

「公開処刑」

シベリアン・デス・マウンテンは、さらにレールを上っていった。これ以上上ったら危険だということを超えても、上っていった。

「これは、スキージャンプでたとえると、フライングヒルだわ」

「K点のKは危険のK」

「K点のKは危険のK」

とうとう一番前が下り始めたらしく、僕と智花は混乱した。

「落ちる、落ちる、いまにも落ちるわ」

「怖い、怖い、乗るんじゃないかった」

「死んでしまう、死んでしまう、伸時と一緒に死んでしまう」

「止める、止める、止めることができるなら止める」

ついにシベリアン・デス・マウンテンがすごいスピードで下り始めた。それは、父さんだったら髪の毛が全部抜けて後ろへ飛んでいきそうなほどの、すさまじいスピードだった。

「うわー」

「きゃー」

シベリアン・デス・マウンテンはほぼ垂直に下って、池の中に突っ込んだ。実は池にはトンネルができていて、シベリアン・デス・マウンテンはトンネルの中を通ったので、僕も智花も誰も濡れなかった。トンネルを抜けると、レールが途切れた部分なので、シベリアン・デス・マウンテンは飛んだ。前のほうは新しいレールに乗ったけど、後ろの三列くらいは乗らなくて、シベリアン・デス・マウンテンは少し後ろに下がり始めた。あまりの恐ろしさに、僕は智花のふとももを掴んだ。智花も僕のふとももを掴んだ。でもシベリアン・デス・マウンテンを電氣の力がフオローして、再び前に進み始めて、僕と智花はほっとしたが、それからシベリアン・デス・マウンテンは一度も減速せず、予定どおり四回転して、ねじれながら落ちたりして、ドリルみたいになっていって、そのうちどう動いているのかすらわからなくなつて、最後にまたスピードアップして、ホームに戻った。

シベリアン・デス・マウンテンが止まってからも、僕と智花は、しばらく動くことができなかった。

「あ、あああ……」

智花は口を開けて震えていた。

「智花…、生きているか……」

僕の声も震えていた。

智花は震えながら僕を見た。

「伸時……」

「うん……」

「伸時……、泣いてるわ……」

僕は目をこすった。目をこすった指に涙がついた。

シートベルトが自動で外れて、僕と智花はシベリアン・デス・マウンテンから降りた。シベリアン・デス・マウンテンから降りた智花は、よろめいて、倒れそうになっていた。僕は智花の体を支えようとしたけど無理で、智花より先に倒れてしまった。見ると、他の人たちも、のたうち回ってもだえていた。でも他の人たちの心配をしている余裕なんて、僕と智花にはあるはずがなかった。

智花はよろよろと立ち上がった。

「これは……、想像をはるかに超える、とてつもなく恐ろしい器具だわ……」

僕もよろよろと立ち上がって、うなずいた。

「こんなに怖かったのは、九歳のときに、智花の母さんが大事にしていた……、あ」

「それは、言わなくてもいいけど、わたし、きゃー、って悲鳴を上げたのは、たぶん、初めてだわ」

「僕も、初めて聞いた気がする」

僕と智花は階段の手すりに掴まって、なんとか地上へ降り立った。

「乗ってから考えると、こんな恐ろしい器具に乘せられた人が、一年間にひとりしか死なないなんて、逆に人間の生命力のたくましさに感心させられてしまうわ」

「まったく、智花の言うとおりだ」

僕と智花は、フェンスの前のゴミ箱の隣のベンチになんとかたどり着いて、座った。

「乗ってから考えると、こんな恐ろしい器具に何十回も連続で乗せられた悪いことをした人が、死ぬんじゃないかって、生きたまま死ぬというのは、まだラッキーなんじゃないかと思えてくるわ」

「まったく、智花の言うとおりだ」

僕は目をこすった。

「伸時、いつまで泣いているの」

「だって、すごく、怖かったから。泣かない智花は、えらいと思う」「わたしは、涙も涸れ果てたわ」

「言い方が、かつこいい」

僕はベンチに手をついて、空を見上げた。太陽が目染みた。

「このまましばらく休んだら、これからのことを、考えよう」

「考えよう」

「伸時は、もうシベリアン・デス・マウンテンには、乗りたくない？」

「智花は、もうシベリアン・デス・マウンテンには、乗りたくない？」

「じつは、そんなことはないわ」

「僕もじつは、そんなことはない」

「だったら、考えるまでもないわ」

「そのようだ」

「このまましばらく休んだら、もう一度、シベリアン・デス・マウンテンに乗ろう」

「そうしよう」

「そうしよう」

6 僕と智花はシベリアン・デス・マウンテンに四回乗った

僕と智花はシベリアン・デス・マウンテンに四回乗った。何度乗っても智花は、きゃー、と叫んだし、降りるときはいつも膝ががくがくしていた。僕も何度乗っても泣いてしまったけど、周りの人も同じような感じだったので、特に恥ずかしくはなかった。四回目ではついに一番前に乗ることができたのだが、僕と智花はマイナス四十度の風を顔いっぱいに浴びることになって、それまで泣かなかった智花も、そのときはさすがに、わんわん泣いてしまった。それまで泣いていた僕も、もちろんわんわん泣いていたから、係の人に気をつかわれることになった。

四回目のシベリアン・デス・マウンテンから降りると、すでに辺りは薄暗くなっていた。僕と智花はまたベンチに戻って、放心状態になっていた、二人とも、まともに口が利けなかった。

「ああ……、ああ……、ああ……」

「う……、ああ……」

「おお……、ああ……、ふああ……」

「あう……、ううう……」

僕と智花は、まともに口が利けなくなっていたので、会話が成立しなかった。

そのとき、僕と智花の前に、瑞歩と小池くんが現れて、僕と智花は、瑞歩と小池くんと四人でシベリアワールドに来ていたことを思い出した。

瑞歩が驚いた顔をして、智花、伸時くん、一体どうしたの？、と言った。

小池くんが僕と智花の脈を取って、二人とも生きているけど、まるで死んでいるみたいだ、と瑞歩に報告した。

智花が、瑞歩と小池くんに、ああ、何か飲み物を、と言った。

瑞歩と小池くんは走って行って、オレンジジュースを二つ買って

きてくれた。僕と智花はオレンジジュースをよく飲んだ。そしたら口が利けるようになった。

「助かったわ、瑞歩、小池くん」

「もう少して、僕と智花は、脳が枯渇するところだった」

瑞歩と小池くんは、安心した様子だった。

「だから言っただよ。シベリアン・デス・マウンテンは危ないって」

「たしかに、シベリアン・デス・マウンテンは、危なすぎたわ。でも、クセになる、危なさだったわ」

「危険な魅力」

「アウトロー」

「そんなの、僕には到底理解できないね」

小池くんは、ひねた子どもみたいな発言をした。そして瑞歩と小池くんは、あきれたアメリカ人のジェスチャーをした。瑞歩と小池くんが打ち合わせなしに同じジェスチャーを同時にしたので、僕は不思議に思ったし、おそらく智花も不思議に思った。

小池くんは、腕時計を見た。

「もう六時だから、そろそろ帰ったほうがいいね。帰ろうか」

何故かいきなり仕切りだした小池くんに、智花が、待つて、と言った。

「わたしは、薄暗くなってきたから、最後に観覧車に乗りたいわ」

智花はあんなことがあったのに、計画のことを覚えていた。

瑞歩が、観覧車？、と言つて、くくつと笑つて、小池くんを見た。

小池くんも、くくつと笑つて、僕と智花は不思議に思った。

「僕と瑞歩ちゃんは、すでに観覧車に乗っただけど、そうだね、観覧車から見る夜景は、きつときれいだから、もう一度乗ってから帰るのもいいね」

「え」

智花が驚いた。

「瑞歩と小池くんは、すでに観覧車に乗っていたの」

瑞歩と小池くんはうなずいた。

「三時ごろに乗ったよ」

「二人で、一緒に乗ったの」

瑞歩と小池くんは、くくつと笑った。

「それは、そうだよ。ひとりずつ乗るなんて、どんなに仲が悪いんだよ」

瑞歩は、ひとりで、くくつと笑った。

それから僕と智花と瑞歩と小池くんは、観覧車に向かった。観覧車はシベリアワールドの北の端にあるので、結構歩くことになった。瑞歩と小池くんが前を歩いて、僕と智花が後ろを歩いていたのだが、瑞歩と小池くんはあることが、肩をくっつけて歩いていた。

僕は智花に耳打ちをした。

「智花、智花、何が起きたのかわからないが、僕にはすでに、瑞歩と小池くんがくっついていてるように見える」

智花は目をしばしばさせた。

「わたしにも、すでに瑞歩と小池くんがくっついていてるように見えるわ。朝はあんなに気まずそうにしていたのに、わたしと伸時がシベリアン・デス・マウンテンに四回乗っているあいだに、一体何が、起きたというの」

「わからない」

「わからない」

僕と智花と瑞歩と小池くんは、観覧車にたどり着いた。観覧車はあんまり混んでなかったので、ちょっと待ったら乗せてもらえることになった。

智花は僕に耳打ちをした。

「伸時、とにかく、わたしはわたしの計画を実行に移すわ。四人で乗るふりをして、先に瑞歩と小池くんを乗せて、わたしと伸時は、その次のゴンドラに乗るわ」

「わかった」

そのとき、瑞歩が振り向いた。

「智花、わたしは、小池くんと二人で乗るから、智花は、伸時くんと二人で乗ってね」

「え」

「え」

智花はまた驚いた。僕も驚いた。

「ばいばーい」

瑞歩と小池くんはゴンドラに乗って、係の人が扉を閉めた。

僕と智花はその次のゴンドラに乗って、係の人に扉を閉められた。ゴンドラの中で、智花は複雑な顔をしていた。

「なんだか、これは、おそらく、わたしと伸時がシベリアン・デスマウンテンに四回乗っているあいだに、瑞歩と小池くんに何かが起きて、すでに瑞歩と小池くんがくつついてしまったということのようだけど、わたしの計画が不発に終わったみたいで、わたしは納得がいかないわ」

「智花、結果オーライという言葉がある」

「あるけど」

「それより、せっかく観覧車に乗ったのだから、夜景を見よう」

「そうね」

僕と智花は夜景を見た。薄暗かった空はもう夜の空になっていた。ので、貝田野市の町並みはぴかぴかしていた。高速道路もライトが連なってぴかぴかしていた。遠くには海が見えたし、空には月とかが星が見えた。

「伸時、やばいわ、思ったよりも、夜景がきれいだわ」

「僕も、そう思っていた」

そのまま僕と智花はしばらく黙って夜景を見ていた。観覧車はどんどん高くに上って行って、智花が、もうすぐ頂上だわ、と言った。僕はうなずいて、智花を見た。

智花はすでに僕を見ていた。

智花がいつもよりも女の子っぽい眼で僕をじっと見ているので、

僕は、そういえば僕は一応九年半彼女の智花と二人きりで夜の観覧車に乗っているのだと思った。ということは、頂上に着いたら、何かしないといけないように思われたが、それはさすがに照れるのでやめておいた。でも僕も智花をじっと見ていたし、頂上に着いたときもじっと見ていたし、智花もずっと僕をじっと見ていたので、これはこれで、いいような気がした。頂上をちよつと過ぎたときに、なんとなく瑞歩と小池くんの様子が気になったので、僕はさりげなく振り向いて、下を見た。

「うぎゃー」

僕はありえないものを見た。

「伸時、どうしたの、何を見たの」

智花が、僕が座っている側に来ようとした。

「智花、来るな、智花が来ると、ゴンドラが傾いてしまう」

「でも、わたしも見たいもの」

智花は僕が座っている側に来て、下を覗いた。

「きゃー」

智花は目を背けるかと思ったが、逆にガラスに貼りついてよく見ようとしていた。僕も本当は見たかったので、ガラスにくっついてよく見てみた。

「伸時、伸時、これは一体、どういうことなの」

「わからない、何も、わからない」

「瑞歩と小池くんは、一体何をしているの、あのポーズは、あのポーズは、何のポーズなの」

「わからない、見たことがない」

「あんな、裸よりも恥ずかしいようなポーズは、マンガとかにはあるけれど、実際にあるものだとは、思ってたわ」

「え、智花はそんなマンガを読むことがあるのか」

「ないけど、でも、高校生が、あんな、口ではとても説明できないようなことを、してもいいと思ってるの」

「僕は、思っていない」

「わたしも、思っていないわ」

「でも、瑞歩と小池くんは、してもいいと思っっているように見える」

「素行が不良」

「素行が不良」

「見てもらえないわ」

「モザイクをかけて」

「いまの瑞歩の姿を、瑞歩のお父さんが見たら、泣いてしまうか、怒ってしまうか、生きたまま死んでしまうわ」

智花は携帯電話を取り出した。

「いまの瑞歩の写真を撮って、瑞歩のお父さんに送信してやる」

僕は智花の携帯電話を取り上げた。

「智花、やめろ、そんなことをしても、誰も幸せにはなれない。それに、智花は、瑞歩のお父さんのメールアドレスを、知っていると
いうのか」

「でも、だったら、わたしはいま、どうしたらいいの。観覧車を降りたあと、瑞歩と小池くんと、どう接すればいいの」

「何も見なかったことにして、夜景か僕を見ていればいい」

智花は一回見るのをやめたが、すぐ振り向いて下を覗いた。

「それにしても、どうして瑞歩は、あんなに痛いことをされているのに、あんなにうれしそうな顔をしているの」

「それをいうなら、どうして小池くんは、瑞歩に、あんなことを楽しそうにできるのか、わからない」

「瑞歩と小池くんは、くつついたんじゃないかったの」

「くつついたんだと思う」

「どうして、くつついた初日の女の子に、あんなひどいことをするの。最初からそれが、目的だったの」

「わからない。でも、おそらく本人たちは、ひどいことだなんて、思っていない」

「わたし、女の子にあんなことをする人なんて、おじさんくらいだと思っっていたのに、まさか、小池くんがするなんて。小池くんは、

クラスでは、笑顔がかわいい男の子って言われているのに、これじゃあ、ただの変態じゃない」

「父さんは、したいと思っっているかもしれないけど、どうせできないから、まだいい。小池くんは、絶対そんなことしそうにないのに、あんなガラス張りの部屋でそれをやるほどの隠れた強者だし、そもそも、瑞歩のほうこそ、ただの変態に見えてきた」

「わたしには、もう、瑞歩をかばうことが、できないわ」

僕と智花は少し黙って、瑞歩と小池くんの様子を観察した。

「音声が欲しいわ」

「僕も、そう思っていたけど、それは生々しすぎないか」

智花がため息をついた。

「わたしは、一応九年半彼氏の伸時と、二人きりで初めて観覧車に乗っているから、もし、たまたま瑞歩と小池くんが、キスしてたりしてるのを見ちゃったりしたのなら、もしかしたらわたしと伸時も、そういう気分になるかもしれないって、ちょっと思っていたのだけど、あんなものを見せられたら、気持ち悪いだけだわ」

「え、智花はそんな覚悟をしていたのか」

「してないばか」

智花は僕をパーで殴った。殴られて首が曲がって、またしても瑞歩と小池くんが視界に入った。瑞歩と小池くんは、もう本当に大変なことになっていた。

「うぎゃー」

「なに、なに、どうしたの」

「智花、見るな、智花、見るな」

僕は智花に目隠しをした。

でも智花は、目隠しの隙間から見てしまった。

「きゃー」

僕は智花にちゃんと目隠しをした。

智花も僕に目隠しをした。

「なんて小池くんだ、もうあと四分の一周くらいしか残っていない

というのに、さらにあんなことをはじめるなんて……。あと四分の一周あれば、十分だということなのか」

「それより、瑞歩が……」

「瑞歩が……」

僕は、智花の目隠しをかくぐって、瑞歩を見た。

「うぎゃー、なんだあれは」

智花も、僕の目隠しをかくぐって、瑞歩を見た。

「きゃー、あんなの瑞歩じゃない。もはや人間じゃない」

「うぎゃー、もしかしたらあれが普通なのか」

「きゃー、あんなのが普通なわけないわ。あんなの高校生がやったら、捕まって処刑されてしまふに決まっているわ、って、きゃー、小池くん、もうやめて、それだけはやめて」

「小池くん……、うぎゃー、智花、見るな、もう、絶対見るな」

僕は智花に目隠しをした。智花も僕に目隠しをした。

「きゃー」

「うぎゃー」

「きゃー」

「うぎゃー」

僕と智花と瑞歩と小池くんは、観覧車を降りた。瑞歩と小池くんは、観覧車の中であんなことをしていたのに、観覧車を降りたら普通にしていた。僕と智花は、観覧車の中であんなものを見てしまったので、放心状態になっていて、二人とも、まともに口が利けなくなっていた。

「ああう……、あ、ああああ……」

「だあ……、だ……、だば……」

「ひい……、ひい……、ひい……」

「はう……、は……、う……」

「うう……、じんじ……」

「ぢ……、ぢが……」

僕と智花は、まともに口が利けなくなっていたので、会話が成立しなかった。

瑞歩が驚いた顔をして、智花、伸時くん、一体どうしたの？、と言った。

小池くんが僕と智花の脈を取って、二人とも生きているけど、まるで死んでいるみたいだ、と瑞歩に報告した。

智花が、瑞歩と小池くんに、ががが、がびがび、ばあ、と言った。何と言ったのかは僕を含めて誰にもわからなかったけど、瑞歩と小池くんは頭がいいので、たぶんさっきと同じことだろうと思ってくれたみたいだった。

瑞歩と小池くんは走って行って、ピーチジュースを二つ買ってきてくれた。僕と智花はピーチジュースをよく飲んだ。そしたら口が利けるようになった。

「やられたわ、瑞歩、小池くん」

「もう少しで、僕と智花は、目が爆発するところだった」

瑞歩と小池くんは、まったく同じタイミングで、くくつと笑った。

「まともに口が利けなくなるまで、二人は観覧車の中で、一体何をしていたの？」

「それは、おまえらが」

「タイガー」

「あう」

智花がその場にしゃがみ込んで、僕のぼろぼろの膝にグラントタイガーを放った。僕は膝を押さえてうずくまった。智花はやけくそになったみたいで、さらに僕に追い打ちをかけた。

「タイガー、タイガー」

「あう、あう、やめろ、智花、選手生命が」

「タイガー、タイガー」

「あう、あう、半月板損傷」

「半月板損傷」

「半月板損傷」

7 僕と智花がおみやげを買ってこなかったから父さんがすねた

僕と智花がおみやげを買ってこなかったから父さんがすねた。父さんは、僕と智花がシベリアワールドから帰ってくるのを智花の家で智花の父さんと座って待っていたのだが、僕と智花を見るなり両手を前に突き出して、わけのわからないことを口走った。最初、僕と智花は、父さんが何を言っているのかがわからなくて、僕は心配したのだが、父さんが、6D、6D、とうれしそうに叫んだので、僕と智花は、ああ、おみやげのことか、と思った。そして、智花が、忘れたわ、と言った。そしたら、父さんは、ひどく落ち込んでしまっ、それからものすごく怒り出して、家に帰って、寝てしまった。智花が、ごはんを食べてお風呂に入って寝るわ、と言ったので、僕も家に帰って、ごはんを食べてお風呂に入って寝た。

次の日の朝に、僕が起きると、父さんは納豆とウインナーと白いごはんを食べていた。僕は父さんに、父さん、おはよう、と挨拶をしたが、父さんは僕を無視した。僕は、父さんの耳が悪くなったか耳栓をしているのだと思ったので、もう一度大きな声で、父さん、おはよう、と言った。それでも父さんは僕を無視したので、僕はあきらめて朝ごはんを食べはじめた。僕はたまごかけごはんを食べることにしたので、白いごはんに生たまごをかけた。父さんの手の近くに醤油のビンがあったので、僕は父さんに、父さん、醤油をとって、と頼んだ。父さんは今度は僕を無視しなかったけど、醤油じゃなくてソースを渡すという嫌がらせを僕にして、会社に働きに行ってしまった。そこで、僕は、父さんは、僕と智花が3Dメガネを買ってこなかったことをいまだに怒っているのだと気づいた。

その日の昼休みに、僕が二組で宮下とかと机をくっつけて一緒に弁当を食べようとしていると、二組に智花が入ってきた。智花は自分の弁当箱を持っていて、右手には、シベリアワールドの一日フリーパスをつけていた。

「伸時」

「智花、どうした。二組に来るとは、めずらしいではないか」

「話があるから、一緒にお昼を食べよう」

僕はうなずいた。

「ちょうどいい。僕も、智花に話があったから、一緒にお昼を食べよう」

僕と智花は、弁当箱を持って、廊下をあちこちさまよって、家庭科室に入った。家庭科室の鍵は開いていたけど、無人だったので、僕と智花は椅子に座って、机に弁当箱を置いて、開けて、一緒に弁当を食べた。

弁当を食べ終わると、お茶を飲んで、智花が喋りだした。

「昨日は大変なことがあったから、よく考えずに寝ちゃったけど、よく考えると、わたしと伸時は、おじさんに、3Dメガネを買ってくるって約束したのに、買ってこないという、ひどいことをしてしまったような気がするわ」

「僕も、そう思っていた」

「おじさんは、今朝は、どうだった」

「怒っているようだった。僕におはようと言わなかったし、僕にソースを渡したし、会社に行きに行った」

「やっぱりそう」

智花は重苦しい顔をした。僕も重苦しい顔をした。

「わたしは、このまま、おじさんがわたしのことを嫌いになって、わたしに話しかけないでいてくれたら、結構うれしいような気がするけれど、でも、それじゃあいけないと思うの」

「うん」

「わたしは、嘘をつくことはときどきあるけど、約束を破ることはあまりないの」

「知ってる」

「だから、おじさんに、お詫びの品を贈ろうと思う」

「いい考え」

「放課後に、伸時と一緒に、お詫びの品を買いに行きたいのだけど、サッカー部は、何時に終わる？」

「今日は、僕は、サッカー部には行かないつもり」

「どうして、伸時は、サッカー部には行かないつもり」

「グラントタイガーの後遺症で、走ることができないから。大事を取って、休みをもらう」

「まだ、痛かったの」

「違和感がある」

智花は机の下に頭を下げ、僕の膝を見た。

「病院へ行く？」

「病院へは行かない。サロンシップを貼っているから」

「あの、のびのびで有名な」

「そう」

「冷たくて、気持ちいい？」

「冷たくて、気持ちいいけど、貼ったのは朝だから、いまはあんまり冷たくない」

「わたしも、どこかに貼ってみたい」

「帰ったら、一枚あげる」

智花は机の下から頭を上げた。

「じゃあ、放課後になったら、校門のところで待ち合わせでいい？」

「いいけど、でも、父さんのことだから、お詫びの品を買うよりも、智花が肩たたき券とかを作って、あげたほうが、より効果的だと思うのだが」

「それは、わたしも考えたけど、それだと、わたしがきつすぎるし、伸時が楽すぎるから、いやだ」

「じゃあ、僕も足を揉む券を作って、父さんにあげる」

智花は少し考えた。

「でも、おじさんのことだから、昨日の今日だから、調子に乗って、瑞歩が足を揉んでくれる券が欲しいとか、言いそう」

僕は少し考えた。考えたくないことを、考えた。

「でも、瑞歩はかなりのあれだから、父さんの足すら、うれしそうに揉むかもしれない」

「それは、そうだけど……」

智花が窓の外を見てぼんやりした。僕は、智花が、昨日の観覧車のことを思い出しているのだと思った。

「智花、やめろ、まともに口が利けなくなるぞ」

「あ…、あああ……」

「おそかった」

「ががが、がびがび、ばあ」

僕は走ってバナナジュースを買いにいった。智花はバナナジュースをよく飲んだ。そしたら口が利けるようになった。

「助かったわ、伸時」

「あぶないところだった。しかし、智花は、反応が早すぎる」

「仕方がないわ。だって、瑞歩と小池くんは、今日……」

智花はそこで言葉を詰まらせた。

僕は悪い予感がした。

「瑞歩と小池くんが、今日、どうしているというのだ」

「瑞歩と小池くんは、今日、そろって学校を休んでいるわ……」

僕は驚いた。まばたきをすることさえ忘れた。

「なんてことだ……」

「伸時、どうやら、わたしたちは、とんでもないわけもの同士を、引き合わせてしまったみたい……」

僕は椅子から立って、智花の肩に手を置いた。

「智花、もう、瑞歩と小池くんのこととは、忘れよう」

「そうね、でも、あの二人を忘れられる自信が、いまのわたしにはないわ」

「それなら、いまは、父さんにお詫びをすることだけを考えよう」

智花は少し考えた。

「それなら、できるかもしれないわ」

僕は弁当箱を持って椅子から立った。

智花も弁当箱を持って椅子から立った。

「じゃあ、放課後に、校門のところに集合で」

「校門のところに集合で」

放課後に僕と智花は校門のところに集合して、金宮町の駅まで歩いて、シヨッピングセンターの中に入った。

「伸時は、お詫びの品を何にするか、考えている？」

僕はうなずいた。

「お詫びの品だから、最初に買う予定だった、3Dメガネよりもいいものにしないといけない」

「それは、そうね」

「僕は、お金を食べる貯金箱がいいと思う」

「わたしも、お金を食べる貯金箱がいいと思うわ」

「でも、歩いているあいだに、お金を食べる貯金箱よりも、もっといいものがあるように思えてきた」

「それはなに」

僕と智花はエスカレーターに乗った。

「智花は、父さんが、会社で何の仕事をしているかということを知っている？」

「知らない」

「父さんは、会社で、いる書類と知らない書類を分ける仕事をしている」

「そうなの」

「でも、父さんはおつちよこちよいだから、よくいる書類と知らない書類を混ぜてしまって、上の人に怒られているそうだ」

「かわいそう」

僕はうなずいた。

「だから、父さんがいる書類と知らない書類をきちんと分けられるように、レターケースを買うのはどうか」

智花は目を閉じて考えた。考えてから僕を見た。

「いま、おじさんの気持ちになつて考えてみた」

「どうだった」

「最初は、お金を食べる貯金箱のほうがうれしかったけど、レターケースがあれば、上の人に怒られなくて済むから、レターケースが欲しいと思った」

「じゃあ、レターケースを買おう」

「そうしよう」

「そうしよう」

僕と智花はレターケース売り場に着いた。レターケースはそんなにたくさんなかったが、一番たくさん置いてあるレターケースがスペシャルプライスになっていた。

「伸時、この、真つ白くて真四角でひきだしが五つついている普段は七百九十八円のレターケースが、いまなら五百九十円という安さだわ」

「たしかに、そう書いてある」

「これなら、わたしと伸時で三百円ずつ出せば、おつりがくるわ」

「たしかに、おつりが十円くる」

智花がレターケースを持った。

「考えるまでもないわ。これを買うわ」

「わかった」

僕と智花はレジに並んで、レジの人にレターケースを売ってもらった。僕と智花は三百円ずつ支払つて、おつりを五円玉でもらつて、五円ずつわけた。レターケースは意外と大きくて袋に入らなかった。ので、お店のシールを貼ってもらつて、僕が持つて歩いて帰った。

家に帰ると、僕と智花とエリカは僕の部屋に集まった。エリカは来なくてもいいように思えたが、智花が連れてきてしまった。エリカは空気清浄機の電源ケーブルに噛みついた。僕は、そろそろ空気清浄機の電源ケーブルが切れてしまうのではないかと考えて、エリ

力を捕まえて、膝にのせた。エリカはあはあ言っていた。

智花は、レターケースを包んでいた透明のビニールをはがした。そして、スカートのポケットに手を入れて、油性のマジックを取り出した。

「智花、まさか、エリカの額に何かを書くのか」

智花が強い目をした。

「わたしが、エリカに、そんなひどいことをすると、伸時は思っているの」

「思っていない」

「わたしは、というより、わたしと伸時とエリカは、これから、レターケースに落書きをする」

「え、せっかく買った、新品のレターケースなのに、落書きをしてしまうのか」

智花はうなずいた。

「落書きという言い方が悪かったわ。正しくは、寄せ書き」

「寄せ書き」

「そう。おじさん宛の、心温まるメッセージを書き記して、この真っ白いレターケースを黒く塗りつぶすの」

「名案」

「じゃあ、さっそく、伸時から書いて」

「わかった」

僕は智花から油性マジックを借りて、何を書こうか考えてから、レターケースの右側に文字を書いた。

「なんて書いたの」

「僕は、『父さん、いつもありがとう 伸時』と書いた」

「ほんとうに、心温まるわ」

僕は智花に油性マジックを返した。智花はあまり考えず、レターケースの左側に文字を書いた。

「なんて書いた」

「わたしは、『おじさん、これからよろしくね 智花』と書いた」

「きっと、父さんは、泣いて喜ぶ」

智花はエリカに油性マジックを渡そうとした。でもエリカは犬なので、油性マジックの使い方がわからないようだった。

「どうしたの、エリカ。エリカも、おじさんに心温まるメッセージを書いて」

智花はエリカにむりやり油性マジックを持たせた。エリカはレターケースの上の部分に線を引いてしまった。

「ああ」

「ああ」

エリカは申し訳なさそうな顔をした。

「智花、エリカの手はマジックを持つようにはできていないから、口でくわえてもらえばいい」

「そうね。エリカ、マジックをくわえて」

智花はもう一度エリカにマジックを差し出した。エリカはマジックをくわえた。そのままエリカはレターケースの上の部分に文字を書いたが、実際にマジックを動かしていたのは智花だった。

「エリカ、上手、エリカ、上手」

「エリカは、なんて書いた」

智花は僕にレターケースの上の部分を見せた。

「エリカが上手に、『エリカ』って書いたわ。伸時、エリカを褒めてあげて」

僕はレターケースの上の部分をよく見てみた。そこには、『エリカ』と書いてあるように見えたが、とはいえ、エリカは犬だから、仕方がないことだと僕は思っ、エリカ、上手、と言った。

「これであとは、おじさんへの謝罪の言葉を考えるだけだわ」

そのとき、僕の部屋のドアがノックされて、父さんが、伸時、智花ちゃん、入っていいかい、と言った。

僕は智花を見た。智花も僕を見た。

「まずいわ、伸時。おじさんが、殴り込んできたわ」

「座布団で、頭を守れ」

僕と智花とエリカはそれぞれ座布団で頭を守った。僕は父さんに、入っていい、と言った。

ドアを開けて、父さんが入ってきた。父さんは、スーツを着ていて、コンビニの袋をぶら下げていた。僕は、ああ、父さんは謝る気だ、と思った。

「伸時、智花ちゃん、ごめんね。おじさんは、昨日から、かなり大人げなかったことに、今日の昼に気がついたよ。雪見だいふくを買ってきたから、もしよかったら二人で食べて」

父さんはコンビニの袋を智花に渡した。智花はコンビニの袋を受け取って、父さんにレターケースを渡した。

父さんは泣いて喜んだ。

「智花ちゃん、伸時、エリカ、ありがとう。おじさんは、世界一幸せなおじさんだよ。このレターケースがあれば、上の人に怒られなくて済むよ」

「おじさん、3Dメガネを買ってこなくてごめんなさい」

「父さん、3Dメガネを買ってこなくてごめんなさい」

父さんは涙を飛ばしながら首を振った。

「いいよ、いいよ、このレターケースのほうが、おじさんはよっぽどうれしいよ。さっそくこのレターケースを使って、持ち帰った書類を分けるよ」

父さんは僕の部屋から出て行った。

智花は雪見だいふくを開けた。

「おじさん、家でも仕事をするなんて、仕事熱心」

「見習うべき」

僕と智花は雪見だいふくを食べた。エリカも雪見だいふくを食べたそうにしていたので、僕と智花は半分ずつ、雪見だいふくをエリカに与えた。

8 春休みに入ったので朝からサッカー部に行った

春休みに入ったので朝からサッカー部に行った。サッカー部ではもうすぐ練習試合があるので、今日は紅白戦をやったのだが、僕は右サイドバックの控えなので、控えのチームの右サイドバックを務めた。僕はレギュラーのチームの左サイドの攻撃をかなり抑えつつ、レギュラーのチームの左サイドを高速ドリブルでズタズタに切り裂いてセンタリングを上げまくったのだが、そのため逆サイドから攻め込まれることになり、控えのチームは三対〇で敗れてしまった。

僕は自分のプレーにはそこそこ満足することができたのだが、僕が満足しているところにキャプテンが近づいてきて、山田、お前は自分のプレーに満足しているようだが、それがお前の問題な―のだ―、と僕に言った。それで僕は何を言う、と思ったのだが、サッカーはチームワークのスポーツなので、たしかにキャプテンの言うとおりなのだと思います、これではいけないのだと反省した。

練習が終わったあと、僕はおのれに反省をうながすために、ジャージで走って家まで帰った。その途中で公園に立ち寄って、死んだカラスを見てきた。死んだカラスの頭の向きがこの前に見たときと反対になっていたので、僕は死んだカラスがゾンビ化したか、ふとどきものが死んだカラスで遊んでいるのだと想像した。そして、最近はずかしくなってきたので、死んだカラスはいよいよ腐るかもしれない。でもまだ腐っているわけではなかった。

春休みに入ったので、公園にはバドミントンをしている小学生がいた。それを見ていたら僕もバドミントンをやってみたくなったが、見知らぬ小学生に声をかけることは難しいし、そうなる僕がバドミントンをする相手は智花くらいしかないなので、バドミントンをすることはあきらめた。

家に着く寸前に、智花の家の玄関の前を素通りすると、智花が玄関から出てきた。智花は、智花の家の玄関の前を素通りしたのが僕

だとわかると、ドアを閉めて、玄関の中に戻っていった。

父さんは会社に行って留守だったけど、母さんは主婦なので家にいて、すでに昼ごはんを食べ終えて、徹子の部屋を見ていた。母さんが徹子の部屋を見ているので、僕は、母さんが僕用に作ったと思われる焼きそばを電子レンジで温めて食べた。それから自分の部屋に行って、マンガを読んでいたら寝てしまった。

夕方に目が覚めたら、わらび餅が食べなくなっていたので、僕は一階に下りて、母さんに、わらび餅はあるか、と尋ねた。母さんは、わらび餅はないわ、と答えたので、僕は一度部屋に戻って財布を取ってきて、わらび餅を買うために家を出た。智花の家の玄関の前を素通りすると、智花が玄関から出てきた。智花は、智花の家の玄関の前の前を素通りしたのが僕だとわかると、ドアを閉めて、玄関の中に戻っていった。

僕はスーパーマーケットまで歩いて行って、わらび餅を買った。

しかし、不思議なことに、買った瞬間にわらび餅がそんなに食べられなくなった。さらにもうすぐ夕飯の時間だし、僕は昼から寝ていたので、いまわらび餅を食べると夕飯が食べられなくなるような気がした。なので僕はわらび餅を明日食べることにした。わらび餅の賞味期限は長くはないが、明日までは持ちそうだったので、明日食べることにした。

僕は家まで歩いて帰った。三月の終わりなので、結構日が長くなっていた。途中で道路に椅子を置いて座っているお年寄りの人がいて、僕を見てきたのであまりいい気がしなかったが、僕が、こんにちは、と挨拶をしたら、お年寄りの人も、こんにちばんは、と返してくれたから、いい人だと思った。

家に着く寸前に、智花の家の玄関の前を素通りすると、智花が玄関から出てきた。智花は、智花の家の玄関の前を素通りしたのが僕だとわかると、ドアを閉めて、玄関の中に戻っていった。

僕は智花の家の玄関を開けて、智花に、何をさっきから出たり入ったりしているのだ、と言おうかと思ったけど、言ってもあまり意

味がないことに思えたので言わなかった。たぶん、智花は通販で何かを買って、宅配便の人を待っているのだろうと思った。

家に入って冷蔵庫にわらび餅を入れた。父さんか母さんか智花が誤って食べてしまわないように、わらび餅を包んでいるビニールにマジックで、『伸時のわらび餅』と書いておいた。

一時間くらい後に父さんが帰ってきたので、父さんと母さんと三人で肉を食べた。今晚の肉はこんがりと焼けていて、しかも肉汁がばたばた垂れる、いい肉だった。でも少し脂身が多すぎて、その辺りが僕は不満だったけど、おおむね満足することができた。

そのあとは一番風呂に入って、野菜ジュースを飲んで、テレビを見ながら父さんと将棋を指して遊んでいたのだが、父さんが風呂に入りに行ったので、僕は玄関を出て、智花の家の玄関の前を素通りした。智花はもう玄関から出てこなかったなので、僕は、宅配便の人が智花の家に来てくれたのだなと思った。

明日も朝からサッカー部があるので、僕はまた家に戻って、歯を磨いて、まだ十時だったけど寝た。

9 智花が花粉症になった

智花が花粉症になった。去年までは花粉症じゃなかったのに、今年から花粉症になってしまった、と智花の母さんが困っていた。花粉症になった智花は、僕の部屋に来てくしゃみをするから、テレビの音が聞こえなくて、僕もとても困っていた。

いまでも僕は椅子に座ってテレビを見ているが、さっきから智花が絨毯に寝転んでくしゃみばかりしているので、うるさくて困っていた。

「智花」

「はつくちん」

「出てけ」

「はつくちん」

最近の智花はくしゃみばかりするので、箱ティッシュを持って生活している。マスクをしているが、マスクをしたままくしゃみをするとマスクが使用不能になるので、智花はマスクをあごにしていた。智花の鼻は赤くなって、しかもばりばりになっていた。

「わたし、去年までは花粉症の人のことを馬鹿にしていたけど、今年からは馬鹿にしないことを誓うわ」

「ここから、出ていけ」

智花は寝転んだまま僕を見た。

「どうして、そんなひどいことを言う」

「智花のくしゃみがうるさくて、テレビの音が聞こえないときがあるから」

「我慢して」

「もう我慢できない。花粉症が治るまで、智花には部屋に来てほしくない」

「だったら、伸時もくしゃみをすればいいわ」

智花はティッシュを一枚抜いて、角を丸めて尖らせて、僕に見せ

た。

「こよりができた」

「まさか……」

智花は僕の座っている椅子の前に膝をついた。

「こよりで、伸時の鼻の中を刺激するわ」

「やめて」

「こわいの」

「こわい」

「くらえ」

智花は僕の鼻にこよりを突っ込んだ。僕は目を細くして、口を開いた。

「へっしょーい」

僕はくしゃみをした。

「へっしょーい、へっしょーい」

僕はくしゃみを連発した。智花の箱からティッシュを抜いて、鼻をかんだ。

「わたしの苦しみを、思い知ったか」

「思い知った」

僕は智花の箱からティッシュをもう一枚抜いた。こよりを作った。

「悔しいから、智花の鼻の中も刺激する」

「やればいいわ」

僕は智花の鼻にこよりを突っ込んだ。智花も僕の鼻にこよりを突っ込んだ。智花は変な顔をした。

「はっくちん」

「へっしょーい」

智花は新しいティッシュで鼻をかんだ。僕も新しいティッシュで鼻をかんだ。

「これは、思っていたよりも、楽しいわ」

「僕も、そんな気がしてきた」

僕は智花の鼻にこよりを突っ込んだ。智花も僕の鼻にこよりを突

っ 込んだ。智花は変な顔をした。

「はつくちん」

「へっしょーい」

智花は新しいティッシュで鼻をかんだ。僕も新しいティッシュで鼻をかんだ。

「なんだか、とても罪深いことをしているような気がするわ」

「僕も、そんな気がしてきた」

「禁じられた遊び」

「きつと、罰が当たる」

「このままだと、明日は腹筋が筋肉痛だわ」

「それだけで済めばいいけど」

「何か、心配事があるの」

「肺を痛めるかもしれない」

僕は身震いをした。智花も身震いをした。

「お祓いに、行かなくちゃ」

「それがいい」

僕は椅子から立った。

「でも、神社には、スギ花粉が舞っているから、やっぱり行かないことにするわ」

智花はふいうちで僕の鼻にこよりを突っ込んだ。

「へっしょーい」

「あ」

智花が自分の右手の甲を見た。

「くしゃみが、手にかかったわ」

「ごめん」

智花が僕の顔の前に手を出した。

「拭いて」

「それは、できない」

「伸時のくしゃみよ。拭いて」

「智花の手を拭くと、僕が智花の下僕みたいな気持ちになるような

「気がするし、そうなる屈辱的だから、できない」

「拭いて。わたしの手を拭いて」

「できない」

「早くしないと、手が溶ける」

「僕のくしゃみは、弱アルカリ性だから、手は溶けない」

でも智花は痛そうだった。顔色が悪くなっていた。

「かゆい。いたい。いたがゆい。指の骨が、折れてしまう」

「どうしても、くしゃみがかかっただけで、骨折をすると思う」

「くしゃみがどんどん固まって、空気中の何かを吸収して、鉄よりも重くなるの。そうになったらもう手遅れ。わたしの指は耐えられない。複雑骨折で、もう二度と治らない。だから助けて。早く助けて」

僕は慌てて、ティッシュで智花の手を拭いた。

智花は指が折れなくて済んで、ほっとしていた。

10 砂単小学校でバザーがあつて母さんと智花の母さんと智花が店を出した

砂単小学校でバザーがあつて母さんと智花の母さんと智花が店を出した。母さんと智花の母さんはもらったけど使わなかったタオルとか、もらったけど使わなかった洗剤とか、買ったけど着なかった服を売つたらしい。智花は何も売らなかつたらしい。父さんと智花の父さんと僕もバザーに参加しないかと誘われたけど、父さんと智花の父さんは一緒に競馬を見に行く約束をしていたし、僕もサッカー部の練習があつたので、バザーには行かなかつた。

午前中でサッカー部の練習が終わつて家に帰るとすでに母さんが帰つてきていた。母さんは今日も焼きそばを作ってくれていたので、僕は焼きそばを電子レンジで温めて食べた。母さんはもう焼きそばを食べ終わった後だったので、僕に、タオルと服は全部売れたけど、洗剤が売れ残つたわ、と悔しそうに話をした。あんまり悔しそうだったので、僕も何だか悔しくなつた。それからテレビをつけて、競馬の中継を見た。父さんと智花の父さんは競馬場に行っているから僕と母さんは気をつけてテレビを見ていたが、父さんと智花の父さんはテレビには映らなかつた。

焼きそばを食べたら口の中がソースっぽくなつたので、洗面所に行つてうがいをした。鏡を見たら歯に青のりがくっついていたので歯を磨いた。それから二階に上がつて、僕の部屋でマンガを読んでくつろいでいたら、智花から電話がかかってきた。

「もしもし」

「伸時……」

電話の最初なのに、智花がもしもしと言わなくて、しかも泣きそうな声だつたのでびっくりした。

「どうした」

「助けて……」

「何があつた」

「大変なことになったわ」

「いまどこにいる」

「わたしの部屋にいるから、助けて……」

「わかった」

僕は急いで階段を下りて、急いで玄関を出て、急いで智花の家に
行つて、急いで智花の部屋に入つた。

智花は椅子に座っていた。大変なことになっていた。

「伸時……」

「その右手はどうした」

僕は智花に近づいて、智花の右手にはまっている青いガラスの壺
をさわつた。

「これには、悲しい秘密があるの」

「差し支えなければ、僕に話して」

智花はうなずいて椅子から立つて、絨毯に座つた。僕も智花の前
に座つた。

「わたしは今日、お母さんと、伸時のお母さんと、三人でバザーで
ものを売っていたの」

「それは、知ってる」

「でも、お母さんと、伸時のお母さんが、二人で何でもやってしま
うから、わたしは結構退屈だったの」

「なるほど」

「だから、わたしは途中からものを売ることをあきらめて、ものを
買うことにしたの」

「それで」

「この青いガラスの壺を買つたの」

「いくらした」

「千二百円」

「意外と安い」

「ほりだしもの」

智花は悲しそうにガラスを撫でた。

「わたしは、この青いガラスの壺を一目見て、手を入れてみたかったの」

「どうして、そんなことをしたくなる」

智花は手を持ち上げて、青いガラスの壺を僕の顔の前に出した。

「この青いガラスの壺の口は、手がぎりぎり入るか入らないかの大きさで、しかも、手が入ったらぎりぎり出せるか出せないかくらいの大きさなの」

「そう」

「それで、買って、早く手を入れてみたくてうずうずしていたんだけど、もしもお母さんと伸時のお母さんの前で手が抜けなくなったら、もうすぐ高校二年生なのにみっともないことしないの、って怒られると思ったから、家に帰ってくるまで我慢して、大事に持って帰ってきたの」

「そう」

「それで、ごはんを食べて……」

「何を食べた」

「天むすとコロツケ」

「おいしかった？」

「中の上」

「僕は、焼きそばを食べた」

「おいしかった？」

「おいしかった」

「それで、こうなったの」

「よくわかった」

僕は絨毯から立った。智花を見下ろした。

「智花は、もうすぐ高校二年生なのに、青いガラスの壺に手を突っ込んで抜けなくなるなんて、みっともない」

「言わないで……」

智花は耳をふさごうとした。でも右手は青いガラスの壺に入っているの、左の耳しかふさげなかった。

「みつともない。智花はみつともない」

「ひどい……」

「やーい、やーい」

「うっ……」

智花はうつむいた。僕は、もしかしたら僕が智花をからかいすぎたせいで、智花の心が傷ついて、智花が本当に泣いてしまうかもしれないと思って、焦った。

「もうすぐ高校二年生なのに、やーいやーい、って言う伸時は、もつとみつともないわ」

「実は僕も、そう思っていた。どうしてあんなことを言ったのか、わからない」

僕はうつむいた。恥ずかしくなってきた。

「それで、手が抜けないの」

「うん」

「お母さんに見られると、怒られるの……」

「智花の母さんは、怒ると異様に怖い」

「抜いて」

「わかった」

僕は青いガラスの壺を足の間に挟んで固定して、智花の手首を両手で握った。

「思いつきり、引っぱる」

僕は智花の右手を思いつきり引っぱり上げようとした。でも、智花の右手は、青いガラスの壺から抜けなかった。

「痛い、痛い、伸時、やめて、おねがい、やめて」

僕は引っぱるのをやめた。

智花は途方にくれていた。

「このままだと、わたしは一生右手だけドラにゃんになってしまっわ」

僕は首を振った。

「ちがう。ドラにゃんは、体は青いけど、手足は白い」

「そうだっけ」

僕は携帯電話を光らせて、智花に見せた。智花は携帯電話をじっと見た。

「ほんとう。でも、どうして伸時の携帯の待ち受け画面は、ドラにゃんなの」

「ドラにゃんは、一見ベタだけど、待ち受けにするにはもってこい」
「よくわからないわ」

「智花にも、わかるきがきつとくる」

智花は眉を寄せた。

「なに、その上から目線」

「なんでもない。言ってみただけ」

智花は強い目をした。強い目をして僕をにらんだ。

「伸時は、わたしが右手だけドラにゃんになったから、いまのうちに言いたいこと言ってしまえって、思っているんでしょ」

僕は下を向いた。

「そういう考えは、ちょっとはある」

「右手が普通になったら、おぼえてろ」

智花の母さんが一階から、智花ー、と言った。

智花が、はい、と言った。

「お母さんはいまから、ヨガ教室に行ってくるから、伸時くんとお留守番をしていてくれる？」

「伸時は途中で帰るかもしれないけど、わたしはお留守番をするわ。でも、わたしも三時になったら茶道教室に行くわ」

「いつてきます」

「いつてらっしゃい」

智花は窓際に立って、智花の母さんが自転車でヨガ教室に行くのを見ていた。

「これはチャンス」

智花は後ろに歩いて、ドアを開けた。

「ついてきて」

僕は絨毯から立って、智花の後ろをついていった。

智花はバスルームに入った。僕もバスルームに入った。

「エリカが入ってくると、エリカが濡れるから、ドアを閉めて」

「エリカは、玄関マットの上で仰向けになって寝ていた」

「でもエリカは、起きてくるかもしれないから、ドアを閉めて」

僕はバスルームのドアを閉めた。智花は靴下を脱いで、腕まくりをした。僕も靴下を脱いだ。

「智花は、何をするつもり」

「わたしは、お湯と石けんで手首をぬるぬるにして、青いガラスの壺から手を抜くつもり」

智花はシャワーのお湯を出して右腕を濡らして、石けんを塗って泡を立てた。

「僕は、何をすればいい」

「伸時は、何もなくていいわ」

「どうして」

「わたしは、さっき、伸時に腕を引っぱってもらったとき、手がちぎれそうなくらい痛かったから、できれば伸時には頼みたくない。もしもぬるぬるにしてもひとりで抜けなかったときは、伸時に引っぱってもらう」

「わかった」

智花はお風呂の椅子に座って、青いガラスの壺に左手をかけて、右手を思い切り引っぱった。

「痛い、痛い、やっぱり痛い」

「痛みに耐えて、がんばれ智花」

青いガラスの壺から智花の右手がすぽんと抜けた。あんまりすぽんと抜けたから、智花は背中から転んでしまった。

智花はすぐに起き上がって、背中をさわった。

「せっかく右手が抜けたのに、今度は背中が濡れたわ」

智花の背中にはブラジャーの線が透けていたけど、もし僕が智花に

ブラジャーの線が透けていると言うと、また父さんに似てきたと言われかねないので、僕はそのことは言わなかった。着替えたほうがいい、とだけ言った。

智花は、着替えてくる、と言って、タオルで背中を拭きながらバスルームを出ていった。

僕は青いガラスの壺を見た。青いガラスの壺の口はやかんのふたを開けたところくらいで、智花が言ったとおり、手が入るか入らないかぎりぎりの大きさに見えた。

僕はつばを飲み込んだ。

僕の手はそんなに大きいほうじゃないけど、智花は女なので、僕よりも手が小さい。智花の手が抜けなかったということは、もしも僕が手を入れてしまうと、絶対に抜けなくなる。でも僕の手は智花の手より大きいから、青いガラスの壺に入れることも不可能ではないかと思われた。それならちょっとだけ、入るか入らないか試すくらいなら、やってもいいように思えた。

僕はつばを飲み込んだ。

青いガラスの壺の口に、右手を当てて押してみた。四本の指は入るけど、親指がひっかかって入らなかった。僕は親指を折りたたんだ。まだ外側の骨が当たるけど、青いガラスの壺の口はお湯と石けんですでにぬるぬるになっているので、回しながら押したらもしかしたら入るような気がしてきた。ぬるぬるになっているからすぐに出せると思うから、ちょっと入れて智花が着替えてくる前に抜いてしまえばいいと思ったから、僕は体重を乗せながら手を回した。

僕の右手が青いガラスの壺の中に入った。僕はとてもうれしくなった。でも僕は男だから、智花よりは手が大きいから、僕の右手はぬるぬるになっている青いガラスの壺からも抜けなかった。

僕は、智花が戻ってくる前にどうにかしないと、智花にみつともないと言われると思って、慌てた。慌てながらドアを見たら、ドアの隙間が少し開いていて、智花が覗いていた。

「伸時も、青いガラスの壺に、手を入れたのね」

「いつから見てた」

「たぶん、最初に手を入れたところから」

智花が僕に近づいてきた。服を着替えてなかったから、実は最初から隠れて見ていたのだと気がついた。

「はめられた……」

「みつともない」

「うっ……」

「伸時は、もうすぐ高校二年生なのに、青いガラスの壺に手を突っ込んで抜けなくなるなんて、みつともない」

「智花も、もうすぐ高校二年生なのに、ブラジャーが透けてるなんて、みつともない」

智花は胸の前に腕を組んだ。

「前は透けてない。後ろ」

智花は腕を組むのをやめた。

「後ろなら、いいわ」

11 春休みなので父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんと智花と僕で

春休みなので父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんと智花と僕で温泉に旅行に行った。母さんと智花の母さんは主婦だし、僕と智花は春休みなのでたくさん泊まってもよかったのだが、父さんと智花の父さんは平日昼間は働いているし、エリカの留守番も一日が限界なので、土曜日に出発して日曜日には帰ってくる予定になった。

行ったのは隣の県の中にある温泉で、電車で三時間もかかった。電車のシートは三人ずつ横に並べるようになっていて、回転させることもできたので、僕の家族と智花の家族は向かい合って三時間も座っていた。智花の家族の背中に向かって電車が走るの、途中で智花が、気持ちが悪い、と言いだした。僕は智花と席を替わってあげようとしたけれど、智花は、わたしと伸時が席を替わると、わたしはおじさんの隣に座ることになるし、そうすると絶対もっと気持ち悪くなるし、うっかり寝たら何されるかわからないから、嫌だ、と言った。本当は、死んでも嫌だ、と言った。それからあと智花は気持ちが悪そうだったので、僕は父さんと母さんに席を替わってもらってから、智花と席を替わった。

温泉の町に着くと駅前に顔のところに穴が開いている看板が立っていて、父さんがうれしそうに穴から顔を出していたけど誰も写真を撮ってあげようとしなかった。母さんと智花の父さんと智花の母さんと智花がひとり一冊るぶを持って、これから夜までどこに行くかを議論しながら歩いていった。僕は四人の後ろを歩いていたが、振り返ると父さんがまだ看板から顔を出していた。父さんの体は赤い忍者になっていたけど、父さんの顔はともしょんぼりしていたので、僕は父さんがかわいそうになった。そう思うと、父さんは旅先でちょっとうかれてしまっただけなのに、みんな揃って無視するなんてひどいような気が少しした。たぶん、父さんは、みんなに、

いい年してみつともないからやめなさい、って言うってほしいのだと思う。でも、いくらかわいそうだからといって、僕が同情して父さんの写真を撮ってあげると、父さんのプライドにキズがつくので、やめておいた。

「伸時」

いつのまにか、智花が僕の隣に立っていた。

「あれは、やめさせたほうがいいわ。ここから見ると、おじさんは馬鹿みたいだし、このままだとおじさんは、地元の中学生たちにまで馬鹿にされるか、冷たい視線を送られるわ」

僕はうなずいた。

「でも、父さんはあの看板が気に入ったみたいだから、写真を撮ってあげないと、出てこないかもしれない」

母さんと智花の父さんと智花の母さんが、僕と智花の後ろに立っていた。智花の母さんが大きなバッグを地面に置いて、智花の肩に手をのせた。

「智花。おじさんは、智花に、おじさんはもういい年なんだから、子どもみたいなことはやめなさい、って、言ってもらいたいの」

「智花ちゃん智花ちゃん、おじさんに、おじさんはもういい年なんだから、子どもみたいな真似はやめなさい、って、言ってきてあげてよ」

智花が渋い顔をした。

「どうして、わたしがそんなめんどくさくて、屈辱的なことを言わないといけないの。そんなことを言ったら、わたしまで、地元の中学生たちに馬鹿にされるかもしれないわ」

母さんが智花に小さく頭を下げた。

「智花ちゃん、ごめんなさいね。あの人は、そういう人なの。昔から、そういう人なの」

智花の母さんが、智花、このままだと、智花が楽しみにしているアンバランスな古城を見に行くことができないわよ、と言って、智花の背中をトンと押した。

智花は前によるめいて、その次に横によるめいて、僕にぶつかって僕を見た。

「じゃあ、仕方がないから、伸時も一緒に来て」

「わかった」

僕と智花は、父さんが入っている看板に近づいていった。地元の中学生たちがへらへらしながら横から見ていて、智花がすごく嫌そうだった。

「智花は、地元の中学生たちが嫌？」

「わたしは、地元の中学生たちが嫌」

僕は地元の中学生たちを呼んだ。

「地元の中学生たち」

地元の中学生たちが僕と智花に近づいてきた。地元の中学生たちは四人いて、四人ともソーダアイスをむさぼるように食べていた。智花が地元の中学生たちをにらんだら、地元の中学生たちはちよつと怯えてうつむいた。

「智花が嫌だと言うから、こっちを見ないでくれないか」

地元の中学生たちはもごもごもごもごも言っていた。地元の中学生たちがもごもご言うのは智花がにらんでいるからだと思ったので、僕は智花に目隠しをした。地元の中学生たちは、もごもごもごもごも言うのをやめた。

「だって、あの歳であの看板に入る人は滅多にいないし、しかも無視されてるからおもしろくて、無視してる人もおもしろかったんですもの」

「その気持ちはわからないでもないが、あれは僕の父さんで、智花の父さんはあそこに立っている結構金持ちのおじさんだから、笑いたいなら僕を笑え。智花を笑ったことは取り消せ。さもないと舌をちよん切るぞ」

僕は口から舌をいっぱい出して、ピースの手をしてカニの真似をした。地元の中学生たちは恐れをなして、すいませんでした、と言って帰っていった。

横を見ると、智花が僕を見ていた。

「何かいま、伸時がかっこよかった気がしたわ」

「かっこつけたから」

「もう一回、カニの真似をして」

僕はピースの手を作った。

「かっこいい」

「ちょっきんちょっきん」

「それは、かっこ悪い」

智花はピースの手を作った。

「かっこいい？」

「楽しそう」

「ちょっきんちょっきん」

「ちょっきんちょっきん」

12 温泉に行く前にアンバランスな古城に行った

温泉に行く前にアンバランスな古城に行った。アンバランスな古城は丘の上に立っている古いお城で、国の重要文化財にも指定されている。智花がどうしても見たいと言ったから見に来ることになった。智花がどうしても見たいと言うのは、そんなないことだから、どれくらいすごいアンバランスな古城なのかと思っていたが、近くで見るとさすがにすごいアンバランスな古城だった。

「すごいわ。アンバランスな古城は、やっぱりすごいわ」

智花が興奮していた。興奮している智花は、尋ねてもいないのに、僕にうんちくを述べ始めた。

「このアンバランスな古城は、天保七年に完成したのだけど、明治時代の集中豪雨で土砂崩れが起きて、左に傾いてしまったの」
「なるほど」

「それ以来、修理するお金がなくて放置されていたのだけど、アンバランスになっても倒れなかったことから、天保時代の建築技術の高さが証明されることになって、戦後、左に傾いたままで補強されたの」

「なるほど」

「そしてついには、重要文化財に指定されるまでになったのよ」
「すごい」

アンバランスな古城の中に入ることは禁止されていたので、僕の家族と智花の家族はアンバランスな古城の前で記念撮影をおこなった。智花は、父さんに写真を撮る係をやらせようとしていたが、父さんがその辺にいた人に、写真を撮ってください、とお願いしたので、その辺にいた人が写真を撮ってくれて、僕の家族と智花の家族は全員写真に写ることができた。

アンバランスな古城の前で写真を撮ってしまうと、意外とすることがなくなつた。

母さんと智花の母さんが、これからどうするかを話していた。

「これから、どうしましょうかしら」

「まだ三時だから、旅館に行くには早いわ」

「これから、自由行動にして、四時に正門の前に集合しましょうか」

「それがいいわ」

僕の家族と智花の家族は、一時間自由行動をすることに決まった。母さんと智花の母さんと智花が、三人でおみやげを買いに行った。父さんと智花の父さんと僕は、三人でお堀の鯉や野生の動物に餌を与えてあそんでいたが、父さん以外は三十分くらいで飽きてしまったので、別々に行動することにした。

僕は、昨日サッカー部みんなに温泉に行くことをすっかり喋ってしまっていたので、おみやげを選ぶことにした。黒い屋根のみやげもの屋に入ると、レジの裏に大きな亀の甲羅が飾ってあった。

僕はつばを飲み込んだ。

「これは……」

みやげもの屋のおばさんが、僕に近づいてきて、いらっしやいませ、と言った。

「この甲羅は、売り物ですか」

「そうですよ」

「いくらですか」

「三千円ですよ」

「三千……」

僕は財布の中を見た。

「背負ってみますか」

「背負ってもいいんですか」

「もちろん、背負ってもいいですよ」

みやげもの屋のおばさんは壁に掛かっている甲羅を下ろした。甲羅には紐がついていて、両腕を通せるようになっていた。みやげもの屋のおばさんは甲羅を持って僕の後ろに回って、両腕を通してくれた。

僕は甲羅を背負った。

「いかがですか」

「思ったよりも軽いです。これは、本物の甲羅ではないのですか」
みやげもの屋のおばさんはうなずいた。

「これは、地元の甲羅職人さんがひとつひとつ手作りした甲羅です。和紙に糊をたつぷり塗って、その上に和紙を重ねて、乾かして、それを何度も何度もくり返して作られたものです。この技法で作られた甲羅は、和紙だから軽いんだけど、本物の甲羅に負けない強度を誇ります」

僕は甲羅の表面を撫でた。たしかに、本物の甲羅のように硬かった。

「甲羅の模様も見事なものです。一流の甲羅職人と、一流の甲羅画家が揃って初めて、この見事な甲羅ができあがるのです」

「こんなに素晴らしい甲羅が、どうして三千円で売られているのですか」

みやげもの屋のおばさんは悲しそうな顔をした。

「いまの若い人に、甲羅の良さを理解してもらうのは、難しいです。前が寒いだとか、ジャージのほうが楽だとか、口の悪い方だと、亀みたいだ、なんて言う人もいます。本当は一万円で売りたいのだけど、一万円だと売れません。三千円だと赤字なのに、それでも、あまり売れません」

僕は財布の中身をすべて、レジの机の上に出した。

「僕はいま、一万円は持っていないのですが、七千百五十三円は持っています。七千百五十三円で、この甲羅を売ってください」

みやげもの屋のおばさんは微笑んで、三千円だけを取った。

「ありがとうございます。でも、お気持ちだけで十分です。三千円でよろしければ、その甲羅をお売りします」

「じゃあ、三千円で買います」

「ありがとうございます」

僕は四千百五十三円を財布に戻した。

「そのまま背負って行かれますか？」

「そのつもりです」

「では、お印をつけさせていただきます」

「はい」

僕は後ろを向いた。みやげもの屋のおばさんは、甲羅の端に緑色のテープを貼った。

「あなたのような若い方に、甲羅の良さをわかっていただけて、私はとてもうれしいです」

「この甲羅は、素晴らしいです。個人的には、アンバランスな古城よりも、素晴らしいと思います」

みやげもの屋のおばさんは、涙ぐみそうになっていた。

「ありがとうございます。今日は最高の一日になりました。実を言いますと、甲羅は一ヶ月にひとつ売れたらいいほうなのです」

僕はシヨックを受けた。

「信じられない……」

「つらいことですが、ほとんどの方は見向きもしてくれません。でもそれが現実なのです。それなのに、今日は甲羅が二つも売れました」

「僕以外にも、今日甲羅を買った人がいるのですか？」

「はい。ついさっき、かわいらしいお嬢さんが、甲羅を買ってくださいました。そのお嬢さんも、あなたのように、甲羅の素晴らしいさをよく理解しておいでで、私は勇気づけられたものです」

「なるほど」

「もしかして、あなた方はお知り合いなのですか？」

「たぶんそうです」

「そうですね、そうですね。もしもまたこのアンバランスな古城を訪れる機会がございましたら、是非当店にお立ち寄りくださいね。

今度はもっと素晴らしい、甲羅を用意しておきますから」

「楽しみにしています」

僕はみやげもの屋の外に出た。甲羅をつけて歩くのは初めてのこ

とだったが、空も飛べるような気がした。

そのまま歩いて、アンバランスな古城の前まで行くと、アンバランスな古城の前に甲羅をつけた人の後ろ姿が見えたから、僕は近づいた。

13 「智花」

「智花」

智花は振り向いた。そして僕の首の向こう側からはみ出ている甲羅を見た。

「やっぱり、伸時も甲羅を買ったのね」

「やっぱり、甲羅を買ったのは智花だったか」

「こんなに素晴らしい甲羅が三千円で売られていたら、買わないわけがないわ」

「僕もそう思う」

「お父さんとおじさんは、一緒じゃないの？」

「僕と父さんとおじさんは、鯉とかに餌をやっていたけど、父さん以外は飽きたから、別行動を取ることにした」

「そう」

「母さんとおばさんは？」

「あの二人は、お菓子の試食をしてばかり」

「大人だから」

「たぶんそう」

「智花はいま、何をしている」

「わたしはいま、アンバランスな古城を訪れた記念に、記念メダルを買おうとしている」

智花は体を少し横にずらして、僕にメダル販売機を見せた。

「それはいい。僕も買いたい」

「うん。それはいいのだけど、いくつもの悩みがあるの」

「どうした」

「まず、名前を刻むとき、日本人らしく、名字、名前の順番にするか、それともローマ字だから、外国人ぶって、名前、名字、の順番にするか、ということ」

「うん」

「次に、名字と名前、あるいは、名前と名字のあいだに点を打つか、スペースを空けるだけにするか、ということ」

「うん」

「そして、何より問題なのは、名字を、『GOTOU』にするか、『GOTOH』にするか、『GOTO』にするか、ということなのになるほど」

「問題が多すぎて、どうしたらいいか、わからない」

「智花はしゃがみ込んでしまった。僕は智花の肩をぽむぽむ叩いた。そんなに、悩まなくてもいい」

「伸時……」

「立って」

「うん」

「智花は立ち上がった。」

「まず、最初の問題だけど、智花は日本人だから、外国人ぶる必要はない。よって、名字、名前、の順番にすればいい」

「わかったわ」

「次の問題。これはちょっと難しいけど、僕はスペースのほうがすつきりしていいと思う。点を打つとごちゃごちゃした感じになるし、後藤アンド智花みたいな感じにもなる。スペースのほうがいい。あるいは、でもいい」

「は、わたし的にはないから、スペースにするわ」

「僕はうなずいた。智花もうなずいた。」

「そして、最後の問題だけど、これは本当に難しい。後藤は『ことう』だから『GOTOU』が正しいような気がするけど、読み方は『GOTOH』のほうが近い。でも『GOTO』は『こと』だし、『ゴートウ』だし、強盗みたいだから、やめたほうがいい」

「そうね。『GOTO』はやめにするわ。私もほんとうは、『GOTO』はないなって、思っていたの」

「僕はうなずいた。智花もうなずいた。」

「『GOTOU』か、『GOTOH』か。『GOTOU CHIK

A』はちよつとかつこ悪いし、『GOTOH CHIKA』はちよつと調子に乗つてゐる感じがする」

「もつと言つと、『CHIKA』にするか『CHICA』にするかでも、迷つてゐるの」

「それは、好きなほうでいいと思う」

「だったら、わたしは『CHICA』のほうがかわいいから、『CHICA』にしたいわ」

「だったら、『CHICA』にすればいいと思う」

「そうする。そうなると、やっぱり最大の問題は、『GOTOU』か『GOTOH』ね」

「そうなる」

僕は考えた。智花も考えた。後ろに子どもが並んできたので、僕と智花は横にどいて、順番を譲つた。

智花はため息をついた。

「どうしてわたしは、後藤っていう名字なの」

「それは、智花の父さんが、もともと後藤だったから」

「こんなことで悩むなら、私も山田とかのほうがよかつたわ。山田なんてどうやって『YAMADA』にしかないもの」

「だったら、智花も『YAMADA』にすればいい」

「どうということ」

「僕と智花は、いろいろあつたけど、もう九年半も付き合つてゐるから、このまま二人とも他に好きな人ができなければ、二十五歳くらいの時に結婚する可能性が高い」

「わたしは、結婚は、二十八歳くらいでしたいわ」

「じゃあ、二十八歳くらいで結婚する可能性が高い。そうなると、智花は山田になる可能性が高い。だから、『YAMADA CHICA』でメダルを作つてもいいと思う」

智花はしばらく、難しい顔をしていた。

「もしわたしが、『YAMADA CHICA』でメダルを作ると、お父さんが悲しんで、おじさんが喜びそうな気がするわ」

「たぶんそうなる。でも、隠してしまえば、おじさんは悲しまないし、父さんも喜ばない」

智花はまた考えていた。考えているうちに、子どもがメダルを作った帰っていった。

智花はメダル販売機の前に立って、お金を入れた。

「じゃあ、わたしはいま、山田を名乗るわ」

「どうぞ」

「でも、わたしは伸時のことが好きじゃないから、できれば伸時じゃない人を好きになって、伸時じゃない人と結婚したいわ」

「僕も、智花のことが好きじゃないから、できれば智花じゃない人を好きになって、智花じゃない人と結婚したい」

「でも、いままでわたしは伸時じゃない人を好きになることはなかったから、もしも二十八歳になってもこのままだったら、そのときはあきらめて伸時と結婚するわ」

「僕も、二十八歳になってもまだ智花と付き合っていたら、あきらめて智花と結婚する」

メダル販売機がガンガンいって、文字を刻まれたメダルが出てきた。僕と智花はメダルを見た。メダルには『YAMADACHICA』と刻まれていた。

「うっ……」

智花はしゃがみ込んでしまった。

「どうした、智花」

「何だかこれは、相合い傘的な感じがして、想像以上に恥ずかしいわ。こんなこと、するんじゃないかった」

「山田智花」

「わー」

智花は耳をふさいだ。

「みそ汁を作ってくれないか」

「わー」

智花はメダルを握った手で僕を殴った。

「悔しいから、伸時も、『GOTOU SHINJI』か『GOTOH SHINJI』で、メダルを作れ」

「どうして、僕が婿養子にならないといけない」

「婿養子にならなくてもいいから、とにかく作れ。冗談で名字を交換したみたいな感じにするために、後藤を名乗れ」

「わかった」

僕はメダル販売機にお金を入れて、文字を刻ませた。メダル販売機がガンガンって、文字を刻まれたメダルが出てきた。智花が、僕より早く、メダルを取った。

メダルを見て、智花は青ざめた。

「どうして、『YAMADA SHINJI』って書いてあるの」

「これは、僕は婿養子にはならないという、意思表示」

智花は頭を抱えた。

「これは、さっきまでより、相合い傘的な感じがするわ。最悪だわ」

「山田伸時山田智花」

「わー」

智花は耳をふさいだ。

「パンツを洗ってくれないか」

「わー」

14 四時に門の前に集合してバスで旅館に行った

四時に門の前に集合してバスで旅館に行った。僕の家族と智花の家族は甲羅の良さがわかるみたいで、甲羅を絶賛してくれた。父さんが、伸時か智花ちゃん、どっちでもいいけど、おじさんにちよつとだけ、甲羅を背負わせて、と言った。智花は父さんを見無視していたから、僕もあえて父さんを見無視した。

予約してあった旅館に着いた僕の家族と智花の家族を、紺色の着物を着た女の人は何人も出迎えてくれた。そのまま部屋に案内されたが、部屋は三階にあつて、二部屋あつた。僕は当然、一部屋に僕の家族、もう一部屋に智花の家族が入るものだと思っていたが、智花の母さんが部屋の前で、部屋割りはどうしようかしら、と言ひ出した。

「山田と後藤で分けるか、男と女で分けるか、グーとパーで決めるか、コインを投げて決めるか、どうしようかしら」

父さんが、グーパー、グーパー、と叫んだ。

智花の父さんが、お父さんは、男と女で分けるのがいいと思うよ、と言った。

母さんが、でも普通は山田と後藤で分けるわよね、と言った。

智花が、わたしも、普通に山田と後藤で分けるのがいいと思うわ、と言った。

僕が、でも山田と後藤で分けると、四対二になる、と言った。

「ばか」

智花が僕のボディを殴ろうとした。僕は腰を引きながら手で防御した。

「伸時くん伸時くん、どうして山田と後藤で分けると、四対二になるの？」

「だって智花は山田メダルを」

「言っなばか」

智花が僕のすねを蹴ろうとした。僕は後ろに走って避けたけど、智花が追いかけてきたから、もつと後ろに走った。

智花の母さんが、仲居さんが見てるから、けんかはやめなさい、と叫んだ。

僕と智花は、智花の母さんが怒ると怖いので、けんかをやめた。母さんがまじめに入った。

「じゃあ、山田が右の『ひぼたんの間』、後藤が左の『みずばしよの間』にするわ。誰か何か文句がある？」

父さんが手を上げかけたけど、結局ちゃんと上がらなかった。

部屋に入るとき、僕は智花に、智花はこつち、と言おうかと思っただけど、顔が本気で怒っていたのでやめておいた。

ひぼたんの間は六畳の部屋と八畳の部屋がふすまで仕切られてくっついていて、しかもベランダに露天風呂までついていて。荷物を置いて、甲羅を外して、お茶を飲んでくつろぎながら旅館のパンフレットを見ていたら、ベランダの露天風呂より大浴場のほうがよっぽど立派なことがわかった。それで僕と父さんはひぼたんの間から廊下に出て、みずばしよの間にいた智花の父さんを誘って、三人で大浴場の男湯に行った。大浴場は地下一階にあつたので、僕と父さんと智花の父さんはエレベーターに乗って地下一階まで下りた。父さんは冗談で女湯に入ろうとしたけど、僕と智花の父さんが相手をしなかったから、ひっこみがつかなくなったみたいで、赤いのれんの前で止まっていて、女湯から出てきた女の人にすごい顔で見られていた。

大浴場には露天風呂もサウナもあったので、僕と父さんと智花の父さんは露天風呂とサウナを行ったり来たりした。父さんと智花の父さんはサウナを出るたびに水風呂に入っていたけど、僕は水風呂はあまりに冷たいから、逆に体に悪そうに思えて、入らなかった。露天風呂の竹の壁の向こうには女湯の露天風呂があると推測されたので、父さんは竹の壁の上のところをもの欲しそうに眺めていた。僕は、父さんは女湯を覗きたいのだなと思ったけど、父さんには女

湯を覗く勇氣も行動力もないと見なしたので黙っていた。

風呂から上がって、浴衣を着て、大浴場を出て部屋に戻ると、ひばたんの間に夕食の用意がしてあった。さっきまでなかった机があって、座布団が六つ敷かれていたので、誰かがあらかじめ旅館の人に、山田と後藤は夕食を一緒に食べる、と言っておいたのだなと思った。母さんと智花の母さんと智花も大浴場に行っているみたいで、僕たちはおながが空いていたけど、三人が戻ってくるまで食べずに待っていないと怒られるとの考えで一致したので、食べずに座って待っていた。

十分もしないうちに、母さんと智花の母さんと智花がひばたんの間に入ってきた。母さんが、お待ちどおさま、と言った。母さん、智花の母さん、智花の順番で部屋に入ってきたのだが、智花がすごいことになっていた。

「智花……」

「なに」

智花は僕の前に座って、首をかしげた。

「なに、伸時、なに」

「どう言えればいいか、わからない」

「なに、伸時、なに、気になるから、言って」

僕は、僕の右側に座っている父さんを見た。父さんももちろん智花がすごいことになっているのに気づいていた。父さんは智花に、智花ちゃん、やばいね、湯けむりエフェクトでかわいさが三倍、セクシーさは十倍で、すごくかわいいね、と言った。

「そうなの」

智花は、父さんのほうはまったく見ないで、僕の目を覗き込むようにした。

「伸時も、おじさんと同じ事を、思っているの？」

「僕は、かわいさ五倍、セクシーも五倍くらいだと、思っている」
智花は不思議そうな顔をした。

「どうして。いつもはお風呂上がりにも会っても普通にしているのに、

どうして」

智花の母さんが智花を見た。

「それは、温泉と家のお風呂の違いよ」
母さんが智花を見た。

「あと、浴衣ね」

智花は、智花の母さんを見て、母さんを見てから、僕を見た。

「そうなの」

「たぶんそう」

「そう」

智花は自分の髪の毛を撫でた。

「それは、そんなに、悪い気がしないというか、どっちかというと、うれしいわ」

15 僕と父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんと智花は夕食を食べ

僕と父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんと智花は夕食を食べはじめた。夕食は海老とか、海老に黄色い花がのつていたりして、おいしかった。父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんは、たくさんビールを飲んだ。父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんは、僕と智花にもビールを飲ませようとした。僕は真面目なのでビールを飲まなかったけど、智花はそんなに真面目じゃないので、少しビールを飲んでた。食べるものがなくなっても、大人たちはビールを飲んでいたので、僕はうつとうしくなってきた。窓際の椅子に移って、外を見ていた。しばらく外を見ていたら、窓ガラスに智花の姿が映ったので、僕は智花を見た。

智花は僕の前の椅子に座った。

「伸時」

智花はビールを飲んだので、顔が赤くなっていて、さっきまでよりもっとすごいことになっていた。

「なに」

「散歩に行きたい」

「行けばいい」

「伸時も行こう」

「どうして」

「わたしは、夜の温泉街を浴衣で歩くのが、やってみたい」

「やってくればいい」

「だから、伸時も行こう」

「いやだ」

「どうして」

「外に出ても、たぶん、そんなにおもしろいものはみつからないと思うし、それより僕は、温泉旅館で浴衣で卓球が、やってみたい」

「それは、帰ってきてからやるから、ちょっとだけ、散歩に行こう」

「いやだ」

智花は渋い顔をした。

「伸時がそんなに嫌がるのなら、わたしはひとりで散歩をしてくるわ」

「いつてらっしゃい」

「いつてきます」

智花は、散歩に行ってしまった。

僕は、智花が散歩に行くのをここから見ていると思ったけど、この窓からだとも中庭しか見えないので、智花が旅館の玄関から出て行くところは見られなかった。

そのまま二十分くらい外を見ていたら、智花の父さんに、伸時くん伸時くん、智花ちゃんがいけないけど、どこに行ったか知っているかい、と聞かれたので振り向いた。

「智花は、夜の温泉街を浴衣で散歩しに行った」

父さんが、なに、と叫んだ。

「智花ちゃんを、ひとりで行かせたのか」

「そう」

「どうして、伸時もついていかなかった」

「僕は、卓球がしたいから」

父さんが座布団から立って、歩いて僕に近づいてきて、僕の耳たぶを引っばった。

「ばか、ばか、伸時のばか」

「痛い、痛い、どうしてそんな、智花みたいな怒りかたをする」

「智花ちゃんが、いまどういう状態か、忘れたか」

「はっ」

僕は、重大なことに気がついた。

父さんは、僕の耳たぶから手を離れた。

「智花はいま、湯けむりエフェクトにビールまで加わって、星取ったマリオ状態だった」

「星取ったマリオ状態の智花ちゃんが、ひとりで外に出たら、どう

なってしまうと思う」

僕は頭を抱えた。

「それを答えるのは、つらすぎる」

「智花ちゃんは、うかれた男子大学生に、ナンパされることになる」

「うっ」

僕は机に頭をつけた。

「それは、たしかに、僕がばかだ。智花は、僕も一緒に行こうと言ったのに、ついて行かないなんて、僕は、ばか三回言われるくらいの、ばかだ」

「いまならまだ、間に合うかもしれないから、早く智花ちゃんに電話をしろ」

「わかった」

僕は智花に電話をかけた。父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんは不安そうに、智花に電話をかける僕を見ていた。隣のみずばしよの間から、荘厳なメロディが聴こえてきた。

智花の母さんが立ち上がった。

「この、ツイゴイネルワイゼンの着メロは、智花の携帯の着信音だね。智花はもう、みずばしよの間に、帰っているのかもしれないわ」

智花の母さんは座布団から立って、みずばしよの間へ向かった。智花の母さんが戻ってくるまでのあいだ、僕は、意外と壁が薄いのだなと思っていた。

智花の母さんは、智花の携帯電話を持って、とぼとぼと戻ってきた。

「智花は……、携帯を……、持っていていなかったみたい……」

智花の母さんは、畳の上に崩れ落ちた。僕も、畳の上に崩れ落ちた。畳の上で、智花のことを考えた。

「いなくなつて初めて、その人の大切さがわかるという言葉の意味が、僕にもわかったような気がするような気がしないでもない」

智花の父さんが、僕の背中を叩いた。

「伸時くん伸時くん、智花ちゃんは、もしかしたら、まだナンパされてないかもしれないから、いまから智花ちゃんを捜しに行こうよ」
「いまの智花なら、絶対にもうナンパされていると思うけど、捜しに行く」

父さんが、父さんも、智花ちゃんを捜すぞ、と叫んだ。

でも、ひばたんの間のふすまが開いて、智花が入ってきた。智花は、浴衣の上に、白いカーディガンを羽織っていた。

智花の父さんが、智花ちゃん智花ちゃん智花ちゃん、と叫んだ。

智花の母さんが、智花、そんな状態で外に出て、よくナンパされなかったわね、と言った。

智花は眉をひそめて、それからちよつとあごを動かした。

「ナンパされたから、嫌になって、帰ってきた」

智花の後ろには、うかれた男子大学生が、三人もいた。

智花の父さんと父さんと僕は立ち上がった。

「うちの智花ちゃんをナンパするとはいい度胸だ」

「うちの隣の智花ちゃんをナンパするとはいい度胸だ」

「僕と九年半も付き合っていて、山田メダルを作るほどの智花をナンパするとはいい度胸だ」

「言うなばか」

「帰れ」

「帰れ」

「いなくなれ」

うかれた男子大学生たちは恐れをなして、ひばたんの間から出て行った。

うかれた男子大学生たちがいなくなると、智花は、ポットからお湯を出して、お茶を入れて、座布団に座った。

母さんが、智花ちゃん、あんなうかれた男子大学生たちにナンパされて、よく無事に帰ってこられたわね、と言った。

智花は、お茶を飲んで、湯飲みを置いた。

「あのうかれた男子大学生たちは、すぐくしつくくわたしをナンパ

してきたから、わたしは身の危険を感じて、部屋に女の友達が二人いるから、みんなで一緒にあそびましよう、って嘘をついたの」

智花の母さんが、智花を抱きしめた。

「怖かったわね」

「ちよっとだけ」

僕は、智花の隣に行った。

「智花、ごめん。僕がついていけば、こんなことにはならなかった」
智花は首を振った。

「伸時のせいじゃないわ。わたしが、湯けむりエフェクトの力を見くびっていたのがいけないの」

「僕は、湯けむりエフェクトの力に気づいていたのに、智花についていかなかった」

智花は座布団から立った。

「わたしは、懲りずにもう一度散歩に行くわ」

僕も座布団から立った。

「僕も行く」

父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんが、いつてらっしゃい、と言って、手を振った。

16 智花と二人で夜の温泉街を散歩した

智花と二人で夜の温泉街を散歩した。エレベーターに乗っているとき、智花は、さつきは旅館から出てすぐにナンパされたから、まだほとんど散歩していないの、と言った。僕も智花も旅館にあった下駄を勝手に履いて外に出たのだが、いまはまだ三月なので、浴衣に裸足で下駄で歩くには外はかなり寒かった。智花は浴衣の上に力ーデイガンを羽織っているの、あんまり寒くなさそうだった。僕は一度ひばたんの間に戻って、浴衣の上に羽織るジャージとか甲羅とかを取ってきたくなったけど、それは結構めんどくさいので我慢して、散歩を続けた。

夜の温泉街は真っ暗で、店も全部閉まっっていて、人も歩いていなかった。

智花はつまらなさそうに歩いていた。

「これは、つまらないわ。期待を裏切る、つまらなさだわ」

「僕も、ちょうど、そう思っていた」

「温泉街というのは、もっとこう、射的場とか、ピンボール場とか、見せ物小屋とか、あると思っていたのに、何このシャッターストーリー」

「おそらく、いまの時代、いま智花が言ったようなものは、はやらなくなつて、あるいは、後継者が育たなくて、つぶれてしまった」
「せっかく、ナンパの危険をかえりみず散歩に来たのに、むくわれないわ」

僕はうなずいた。

「むくわれないから、もう帰ろう」

「まだ、帰りたくない」

「どうして」

「もう少し先まで歩いたら、見せ物小屋があるかもしれないもの。わたしは、見せ物が見たいもの」

僕は首を振った。

「もう少し先まで歩いて、見せ物小屋はないと思う。寒いから、もう帰ろう」

僕は右手で智花の左手をつかんで、旅館のほうへ引っぱった。智花は僕の左手を右手でつかんで、反対のほうへ引っぱった。そのため、僕と智花はその場でぐるぐる回ることになった。

「どうして、わたしの散歩についてくるって言ったくせに、こんなに早く帰りがかる」

「僕は、本当は、智花がナンパされる危険のある散歩には、行かないほうがいいと思っていた。それでも、智花が散歩をするなら、僕がついていないと、いつもの智花ならともかく、いまの智花は確実にナンパされてしまうから、ついてきただけ」

「でも、誰も夜の温泉街を歩いていないから、誰かにナンパされる危険はないわ」

「でも、智花はさっき、まんまとナンパされた」

「そうだけど」

「だから、もう旅館に帰って、父さんたちと卓球大会をしよう」

「どうして、おじさんを、あの四人の代表みたいに言うの」

「じゃあ、もう旅館に帰って、母さんたちと卓球大会をしよう」

智花は僕の左手を引っぱるのをやめた。僕も智花の左手を引っぱるのをやめた。そのため、僕と智花はその場でぐるぐる回ることをやめた。

「そこまで言うのなら、わかったわ」

「じゃあ、帰ろう」

「でも、せっかく夜の温泉街を散歩しているのだから、何もせずに帰るのは、もったいないとわたしは思うの」

「うん」

「だから、わたしは、この先にあるコンビニまで行って、からあげを買っわ」

「どうして、この先にコンビニがあることがわかる」

「あそこに、光る看板が見えているもの」

智花は、民家の二階と、その民家の隣の民家の二階との隙間を指さした。たしかに、青く光る看板が見えていて、しかもそんなに遠くではないと思われた。

僕はうなずいた。

「でも、どうして、あんなに豪華な海老料理をおなかいっぱい食べたあとに、からあげを買おうとする」

「からあげの中には、すごくおいしいからあげはあるけど、すぐくまずいからあげは、ないと思うの」

僕は、そんなことはないと思ったので、首をひねった。

「伸時は、これまでに、すぐくまずいからあげを食べたことがある？」

僕は、これまでに食べたことのあるからあげの味をできる限り思い出した。

僕は驚いた。

「僕は、すぐくまずいからあげを、食べたことがない」

智花は当たり前のような目で僕を見た。

「からあげには、はずれがないの」

「そうだったのか」

「そして、コンビニで売られているからあげは、特に、コンビニのレジのところで売られているからあげは、まず間違いなく、あたりなの」

「よくわかった」

智花はもう一度、青く光る看板を見た。

「からあげを、買う気になった？」

僕も青く光る看板を見た。

「からあげを買おう」

17 智花と二人で青く光る看板を目印に歩いた

智花と二人で青く光る看板を目印に歩いた。コンビニはそんなに遠くになかったので、少し歩いただけで、もうその角を曲がればコンビニというところまで来た。そのころには、僕と智花は二人ともからあげへの期待がマックスになっていたので、僕と智花にしてはめずらしく、かなりうきうきしながら角を曲がったのだが、コンビニの駐車場は車でいっぱい、コンビニの前には地元の若者たちが何十人もたむろしていた。地元の若者たちは智花をすぐ見てきたので、智花は慌てて僕を見た。僕も慌てて智花を見るところだったけど、あんまり慌てるとうこういう場合はだめなような気がしたので、慌てなかった。

「伸時、これは、あきらかに、わたしたちは運が悪かったみたい」
「そのようだ」

「でも、ひよっとすると、わたしたちの運が悪いわけではなくて、夜の温泉街に地元の若者たちがたむろするのは常識で、だから、あまり人が歩いていなかったのは、そういう理由かもしれないわ」

「智花、落ち着いたほうがいい」

「でも伸時、地元の若者たちが、わたしをすぐ見てくるわ」

「それは、智花がいま、湯けむりエフェクトで星取ったマリオ状態だから、仕方のないことだと思う」

「こういう場合、どういう行動を取ったらいいと思う」

僕は考えた。智花も考えた。

「普通に考えると、余計なトラブルを避けるために、何か用事を思い出したふりか、電話がかかってきたふりをして、旅館に戻るのがいいと思う」

「でも、それは伸時の考えじゃない」

僕はうなずいた。

「伸時の考えを言つて。わたしの考えも、伸時の考えと、きつと同

じだと思っから」

「僕は、からあげが食べたい」

「わたしも、からあげが食べたいわ」

「じゃあ、予定どおり、からあげを買おう」

「うん。地元の若者たちは、まだわたしをすごく見てるけど、あの大人数でいきなりわたしを襲ってくることは、ないような気がするわ」

「僕もそう思う」

「でも、かなりの確率で、からかわれる気がするわ」

「僕もそう思う」

「それでもいいの？ からかわれて、何も言い返さないで帰ると、わたしも伸時も、一生尾を引くことになるわ」

「僕と智花は、コンビニで売ってるからあげを買っただけだから、何もからかわれる理由はない。からかうほうが、間違っている。だから僕は、からあげを買う」

智花は、四秒くらい僕を見た。

「わかった。でも、わたしが、地元の若者たちに引きずり回される恐れがまったくないわけではないから、手をつなごう」

「手をつなごう」

僕と智花は手をつないで、コンビニの中に入った。地元の若者たちが、全員僕と智花のあとをついてきて、コンビニの中に入ってきた。コンビニの中に他の客はいなかったけど、コンビニの中は地元の若者でいっぱいになってしまっで、僕と智花も地元の若者みたいになっていた。

僕と智花はレジに行って、レジにいた地元の若者みたいな店員に、からあげをふたつください、と声をそろえて言った。

「からあげは、夜は作ってないんですよ」

地元の若者みたいな店員は、からあげの機械を指さした。たしかに、地元の若者みたいな店員の言うとおり、からあげの機械は空っぽだった。

「そんな……」

智花がレジに手をついて、うなだれた。

「電子レンジで温めるからあげなら、ありますけど」

地元の若者みたいな店員は、僕と智花の後ろのほうを指さしたけど、そこには地元の若者たちがたむろしていたので、地元の若者みたいな店員が何を指さしたのか見えなかった。でもたぶん、カップに入っている冷たいからあげを指さしたのだろうと思った。

僕は智花の背中を何回か叩いた。

「智花、智花、カップに入っている冷たいからあげでもいいか」

智花はうなだれたまま首を振った。

「カップに入っている冷たいからあげは、はずれじゃないけど、あたりじゃない……。わたしは、レジで売ってる、温かくておいしいからあげが、食べたいの……」

僕は地元の若者みたいな店員を見た。

「他に、からあげを売ってるコンビニは、ありませんか」

地元の若者みたいな店員は、何故か笑った。

「この辺は、二十四時間やってるコンビニも少ないから、近くにはありませんよ」

「そんな」

「そんな」

僕はうなだれた。もともとうなだれていた智花は、ショックのあまり、腰が抜けそうになっていた。

「こんなことになるなら、散歩になんか、くるんじゃないか……」

「智花、残念だけど、あきらめて、もう帰ろう。からあげは、明日どこかのコンビニで買って、電車の中で食べればいい」

智花はうなずいた。うなずいてから僕を見た。

「そうね。明日まで待つだけで、からあげが食べられるわね」

「からあげが食いたいのかい」

突然、地元の若者のひとりしがしゃべり出したので、僕と智花はびっくりして、これは、地元の若者同士の会話なのだと思うことにし

た。

「からあげが食いたいのかい」

でも地元の若者のひとりは、明らかに僕と智花に話していたので、僕と智花は振り向いた。

僕と智花に声をかけた地元の若者は、コンビニの中にいるのに、あやしいものを吸っていた。

僕はちよつとだけ前に出て、地元の若者にうなずいた。

「僕と智花は、からあげが食べたい」

「この時間でもからあげを売っているコンビニを、おれたちは、知っているんだぜ」

「ほんとうか」

地元の若者はうなずいた。

「歩いていくには、あまりにも遠すぎるから、車で連れて行つてやるよ」

「ほんとうか」

地元の若者はうなずいた。

「そのかわり、ひとつ、約束してほしいことがある」

「なんだ」

「おれに、からあげを、ひとつくれ」

「え」

いままで黙っていたくせに、智花がいきなり驚いていた。

「からあげは、たぶん五個入りなのに、そのうちのひとつを、くれと言つのか？」

地元の若者はうなずいた。

「そうだ」

「わたしと伸時がからあげを買うから、あなたは、からあげを二個も、無料で食べようと、考えているのか？」

「そうだ」

「なんて虫のいい考えを、する人なの……」

ビールを飲んだからもともと赤かった智花の顔が、耳まで赤くな

つてきて、しかもぶるぶると震えだした。

「智花、怒らないほうがいい」

「だって、この人は、からあげを無料で食べようとしている」

「仕方がない。からあげは、おいしいし」

「伸時は、怒ってないっていうの？ わたしと伸時は、あるうことか、かつあげをされているのよ？」

「怒っているに決まっている」

僕は地元の若者たちをにらんだ。智花も地元の若者たちをにらんだ。

「おい地元の若者たち」

「おい地元の若者たち」

「僕と智花は、明日からあげを嫌になるほど食べるから、今日は食べない」

「わたしと伸時は、明日からあげを嫌になるほど食べるし、やっぱり晩ごはんのあとに油ものを食べるのはよくないから、今日は食べない」

「ばか」

「ばか」

地元の若者たちが怒り出しそうだったので、僕と智花は身の危険を感じて、走ってコンビニの外に出た。僕と智花は浴衣に下駄なので、追いかけてこられたら捕まるのがわかっていたから、がんばって速く走った。地元の若者たちは、僕と智花を追いかけてきたけれど、途中でスタミナが切れたみたいで、旅館までは追いかけてこなかった。

智花は無事に旅館にたどり着いて、ほっとしていた。

「いい運動になったけど、お風呂に入ったあとなのに、汗をかいたわ」

「僕も汗をかいたし、下駄で走ったから、足が痛い」

「そう言われてみると、わたしも下駄で走ったから、足が痛いわ」

「いまからまた大浴場に行つて、水風呂で足を冷やしたほうがいい」

「わたしは、部屋のベランダについている露天風呂にも入ってみた
いわ」

「それは、やめたほうがいい」

「どうして、あ」

僕はうなずいた。

「そう。部屋のベランダについている露天風呂に入ると、父さんに
覗かれる」

「それは、嫌だわ」

「僕も、嫌だ」

「それは、わたしがお風呂に入っているのを、おじさんに覗かれる
のは、伸時は嫌だという意味？」

「僕がお風呂に入っているのに、父さんが智花が入っていると勘違
いして、覗かれるのが嫌だという意味」

「そう」

智花が僕と智花の手を見た。

「もう、手を離して」

僕は智花の手を離した。

「早く部屋に戻って、タオルと新しい下着を持って、大浴場に行く
わ」

「そうすべき」

「そうすべき」

18 汗をかいた僕と智花はもう一度大浴場に行った

汗をかいた僕と智花はもう一度大浴場に行った。二度目なので、僕はわりと早く風呂から上がった。智花も、わりと早く風呂から上がったみたいだったが、智花は二回も温泉に入ったために、さらに湯けむりエフェクトがかかって出てきて、とてつもないことになっていた。

大浴場からエレベーターに行く途中に卓球台があるのだが、そこではすでに父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんが卓球をしていたので、僕と智花も加わった。卓球をするとまた汗をかいてしまうけど、僕たちの中に卓球のプロはいないので、それほど本格的なプレーをするとは思えず、全力で走るより汗をかくことはないと思われた。他にも卓球をしている知らない人が二人いたので、しかもその二人は見たところそんなにうまい選手ではなかったので、その二人を入れて八人トーナメントをすることになった。

トーナメントの順番は、じゃんけんで勝った順に一番から八番まで決めたのだが、一回戦は智花の母さん対父さん、母さん対知らない人、智花対智花の父さん、知らない人対僕で、これは僕がじゃんけんで一番負けたという意味だった。しかし、僕は知らない人をどうにか下したあと、智花の父さんをなんとかしりぞけた智花と準決勝で激突して、激戦の末に智花を破って決勝に進出したが、決勝では智花の母さんにスコックで負けて、そのあとで智花にすごく怒られた。智花は、智花に勝った僕が、智花の母さんから一点も取れなかったことについて僕をのしつたが、でも智花の母さんは父さんもスコックで倒していたし、もし智花が決勝に進出していたとしても、スコックで負けたと思う。母さんは智花の母さんから一セット取っていたので、向こうのブロックの準決勝が、事実上の決勝戦だったようだった。卓球をしたらみんな疲れ切ってしまったので、それぞれひぼたんの間とみずばしよの間に戻って、朝まで寝た。

次の朝、僕は父さんと母さんが起きる前に起きて、ひとりでこっそり部屋のベランダについている露天風呂に入ってくつろいだ。露天風呂から上がるとすでに父さんと母さんが起きていたので、廊下に出て、智花と智花の父さんと智花の母さんと合流して、一階にある大きな部屋へ朝ごはんを食べにいった。朝ごはんのおかずは魚と納豆と味つけのりとみそ汁で、さっぱりしていておいしかった。朝ごはんを食べ終わるとみずばしのような間に集合して、今日はこれからどうするかを議論したが、智花と智花の父さんと智花の母さんは、エリカが心配だから帰りたい、と言い出した。たしかに僕も、エリカのこと気がなっていた。エリカは孤独が嫌いだから、早く家族が帰ってこない、自分は捨てられてしまったと勘違いしてしまつて、孤独死してしまうかもしれない。智花の母さんが家に電話をかけていたが、エリカは犬なので、電話には出てくれなかった。でも、エリカは、電話が鳴っているのに電話を取れないことに対して、もどかしさを感じているのではないかと思われた。なので、僕の家族と智花の家族は、今日はどこにも行かずに急いで家に帰ることにした。荷物をまとめて部屋を出て、エレベーターに乗って、玄関を出る僕の家族と智花の家族に、紺色の着物を着た女の人たちが、またおこしくださいませ、と言った。

タクシー二台で駅まで行って、コンビニでからあげをたくさん買って、特急電車に乗りながらからあげを嫌になるほど食べた。コンビニで売ってるからあげはやはりあたりだったので、僕と智花は満足した。帰りは僕の家族の背中に向かって電車が走るようになったのだが、途中で僕が気持ち悪くなってきたので、智花の父さんと席を替わってもらった。そのころには、智花はからあげに満足しておなかいっぱいよく寝ていた。

二時間くらい走ったときに、駅でもないのに電車が止まった。僕は、田舎の線路なので、幅が狭いので、対向列車とすれ違うために待っているのだらうと思って、ひまつぶしに外をきよろきよろした。

僕はすさまじいものを見た。

「智花、起きろ、智花」

僕は智花の肩を揺さぶった。

智花は目をこすりながら目を覚ました。

「なに、伸時、せつかくわたしが、気持ちよく寝ているというのに」

「智花、それはすまないが、とにかくいまは、あれを見て、そして読み上げてみてくれないか」

僕は窓の外を指さした。智花は、僕が指さしたところをぼんやり見た。

「スパゲティハウス・チカ」

僕はうなずいた。僕が指さした先には、『スパゲティハウス・チカ』という店の巨大な看板が立っていた。

智花は、眠そうだけど強い目をした。眠そうだけど強い目をして僕をにらんだ。

「そんなことで、わたしをいちいち、起こさないで」

「でも、智花、スパゲティハウス・チカは、おもしろくないか」

智花は首を振った。

「おもしろくない。伸時、少し考えてみて。もし、いま、伸時が気持ちよく寝ているとして、わたしが起きているとして、わたしが窓の外にヤマダ電機をみつけて、それを教えるために伸時を起こしたとしたら、起こされた伸時は、どう思うと思う」

僕はその状況について考えた。考えてから智花に答えた。

「僕は、ヤマダ電機なんかどこにでもある、そんなことでいちいち起こすな、智花のばか、と思うと思う」

智花はうなずいた。

「いま伸時が言ったことの、『僕』と『智花』を入れ替えて、『ヤマダ電機』と『スパゲティハウス・チカ』を入れ替えたバージョンが、わたしがいま思っていることなの」

僕は、いまの僕の発言を、頭の中で組み直した。

「ということは、智花はいま、『智花は、スパゲティハウス・チカ

なんかどこにでもある、そんなことでいちいち起こすな、僕のばか、と思うと思う』と思っているのか」

智花はすでに、二度寝に入っていた。目を閉じて、窓に頭をくっつけていた。

「だいたいそう。そして、さらに言うなら、あれは『スパゲティハウス・チカ』ではなくて、『スパゲティハウス・千力^{せんりき}』」

僕は、漢字だったのかと思った。しかし、智花はすでに眠っていた。電車が動き出したので、僕も眠ることにした。

ようやく金宮町の駅に着いて、駐車場に停めていた車にそれぞれ乗って、家に帰った。家に着くと、僕の家族と智花の家族は全員で智花の家に入った。エリカが玄関に走ってきたので、智花が、ただいま、エリカ、と言って、エリカを抱き上げた。エリカは、まさか家族が帰ってくるとは思っていなかったみたいで、ものすごく喜んで、智花の顔を舐め回した。智花は、顔を舐められるのが好きではないので、エリカを下ろした。エリカは仰向けに寝転んで、腰をくねらせて踊りを踊った。僕は、床に膝をついて、エリカの腹を撫で回した。それから智花は、おみやげの入った袋を持って、わたしはいまから、大橋さんちに行つて、おみやげを渡してくるわ、と言って、出かけていった。父さんと智花の父さんは、競馬の中継を見始めて、母さんと智花の母さんは、テラスで紅茶を飲み始めた。エリカもテラスについていった。僕は、サッカー部の練習試合が近いので、外を走ることにした。家に戻って、ジャージに着替えて、町の中をぐるぐる走った。本当は甲羅を背負って走りたかったが、甲羅を背負って走っていると亀仙流の人とまちがえられるのでやめた。ぐるぐる走って、公園にたどり着いて、死んだカラスを見にいった。でも、死んだカラスはいなかった。死んだカラスがいた木の根元は、土が盛り上がっていて、割られていない割り箸が立っていた。僕は、誰か心のやさしい人が、死んだカラスのお墓を作つてあげたのだな

と思った。そう考えると、もつと早くに、僕が死んだカラスのお墓を作ってあげればよかった、とも思った。僕は、死んだカラスのお墓に手を合わせながら、智花が大橋さんちから帰ってきたら、死んだカラスのお墓ができた話をしようと考えた。

18 汗をかいた僕と智花はもう一度大浴場に行った（後書き）

ひとまずこれで終わります。
また書くかもしれません。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8026k/>

山田伸時 / 後藤智花 2

2010年10月8日11時58分発行